

島根県邑智郡邑南町

馬場山遺跡・順庵原B遺跡・長尾原遺跡発掘調査報告書



2005年3月

島根県邑智郡邑南町教育委員会

序

邑南町は平成16年10月1日に羽須美村・瑞穂町・石見町が合併して誕生しました。

邑南町の黎明は2万年以上前の旧石器時代に求めることができます。そして縄文時代以降今日まで歴史の変遷を経て豊かな歴史的風土を形成してきました。そのことは、町内全域にわたり約950遺跡が散在していることからも知ることができます。しかし歴史を証左する資料は少なく、発掘調査は社会資本整備とともに緊急発掘調査等限られたものしか行われておりませんが、今回の発掘調査で新たな知見を得ることができました。その調査の成果をここに報告いたします。本報告書が当地方の歴史の解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご多忙の中ご指導いただいた関係各位に深く感謝申し上げる次第であります。

平成17年3月

邑南町教育委員会

教育長 立木光男

例　　言

1. 島根県邑智郡邑南町淀原・下龜谷地内（旧瑞穂町）における馬場山遺跡、順庵原B遺跡、長尾原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は旧瑞穂町教育委員会森岡弘典・藤田睦弘が担当した。
3. 発掘調査及び本書作成について、河瀬正利氏（広島大学文学部）、吉川正氏（島根県文化財保護指導委員）、島根県文化財課の指導を受けた。
4. 本書の執筆編集は森岡弘典が行った。
5. 本書掲載の図面作成は森岡弘典、市山真由美がおこなった。遺構遺物の撮影は森岡弘典、藤田睦弘が行い、空中写真の撮影は古川健二が行った。
6. 本書掲載の遺跡分布図は国土地理院の承認を得て同院発行の25,000分の1を複製した旧瑞穂町管内図を使用したものである。
7. 本書掲載の地形図は磁北を示している。
8. 本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。
SI - 積穴住居、SB - 墓建柱建物、SD - 溝状遺構、SK - 土坑。
9. 断面黒塗の遺物実測図は須恵器である。
10. 出土遺物は邑南町教育委員会で保管している。

馬場山遺跡・順庵原B遺跡・長尾原遺跡発掘調査報告書

目 次

序	頁
I. 馬場山遺跡、順庵原B遺跡、長尾原遺跡の位置と環境	1
II. 馬場山遺跡の調査の概要	5
III. 順庵原B遺跡の調査の概要	16
IV. 長尾原遺跡の調査の概要	36
付論 I 長尾原遺跡出土鉄滓、炉壁および鉄鉱石の調査 日立金属株式会社冶金研究所・和鋼博物館	47

図版・挿図・表目次

- 図版第1 a. 馬場山遺跡透景(南東から) b. 同空中写真(真上から)
c. SK-1土層断面(南東から)
- 図版第2 a. SK-1完掘状況(南東から) b. SB-1完掘状況(北から)
c. SB-2完掘状況(東から)
- 図版第3 a. SB-3完掘状況(南東から) b. SB-4完掘状況(西から)
c. SB-5完掘状況(南西から)
- 図版第4 a. SB-6完掘状況(南から) b. SB-7完掘状況(北東から)
c. 馬場山遺跡出土遺物
- 図版第5 a. 馬場山遺跡出土遺物 b. 同
c. 順庵原B遺跡遠景(平成6年度調査区)北東から
- 図版第6 a. 順庵原B遺跡完掘状況(平成6年度調査区)南東から b. 同出土遺物
c. 順庵原B遺跡遠景(平成7年度調査区)北東から
- 図版第7 a. 順庵原B遺跡完掘状況(北東上空から) b. 同(西上空から) c. 同出土石器
- 図版第8 a. 順庵原B遺跡出土遺物 b. SI-1検出状況(西から)
c. 同遺物出土状況(北東から)
- 図版第9 a. SI-1完掘状況(北東から) b. 同出土遺物 c. SI-2検出状況(南から)
- 図版第10 a. SI-2遺物出土状況(西から) b. 同完掘状況(北から) c. 同出土遺物
- 図版第11 a. SI-2出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第12 a. SI-2出土遺物 b. SI-3検出状況(北から) c. 同遺物出土状況(南東から)
- 図版第13 a. SI-3完掘状況(南西から) b. 同出土遺物 c. 同出土遺物
- 図版第14 a. SI-3出土遺物 b. SI-4検出状況(南東より) c. 同完掘状況(南東より)
- 図版第15 a. SI-4出土遺物 b. SB-1完掘状況(東から) c. SB-2完掘状況(真上から)
- 図版第16 a. SD-1検出状況(南東から) b. 同遺物出土状況(同) c. 同完掘状況(同)
- 図版第17 a. SD-1出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第18 a. SD-1出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第19 a. SD-2検出状況(南から) b. 同完掘状況(北東から)
c. SD-3完掘状況(西から)
- 図版第20 a. SD-3完掘状況(北西から) b. SD-4完掘状況(北から)
c. SK-1検出状況(北から)
- 図版第21 a. SK-1遺物出土状況(北西から) b. 同完掘状況(南東から) c. 同出土遺物
- 図版第22 a. SK-1出土遺物 b. SK-2検出状況(北から) c. SK-2土層断面(北西から)
- 図版第23 a. SK-2完掘状況(北東より) b. 同出土遺物 c. SK-3検出状況(南東から)
- 図版第24 a. a. SK-3土層断面(西から) b. SK-3完掘状況(東から)
c. SK-3出土遺物
- 図版第25 a. SK-3出土遺物 b. SK-4土層断面(北西から) c. 同完掘状況(南東から)
- 図版第26 SK-5・6完掘状況(北東から) b. SK-7土層断面(北から)
c. SK-8完掘状況(東から)
- 図版第27 a. SK-9完掘状況(南西から) b. SK-10完掘状況(南東から)
c. SK-11完掘状況(北西から)
- 図版第28 a. SK-12完掘状況(南西から) b. SK-13(北西から)

- c. SK-14・15検出状況(南西から)
- 図版第29 a. SK-14・15完掘状況(北から) b. 発掘調査風景 c. 順庵原B遺跡現場見学会
- 図版第30 a. 長尾原遺跡遠景(南東から) b. 同近景(東から) c. 同空中写真(東上空から)
- 図版第31 a. SI-1, SD-1・2検出状況(南西から) b. 同遺物出土状況(南から)
c. 同完掘状況(東から)
- 図版第32 SI-1出土遺物 b. SD-1遺物出土状況(南東から) c. 同完掘状況(南西から)
- 図版第33 a. SD-1出土遺物 b. 同 c. SD-2完掘状況(東から)
- 図版第34 a. SI-1, SD-1・2, SK-3完掘状況(東から) b. SD-3完掘状況(北から)
c. SK-1検出状況(南から)
- 図版第35 a. SK-1土層断面(南西から) b. SK-2検出状況(南から)
c. 同遺物出土状況(同)
- 図版第36 a. SK-1・2完掘状況(南から) b. SK-4検出状況(北東から)
c. 同完掘状況(同)
- 図版第37 a. SK-4出土遺物 b. SK-5、A3号墳検出状況(西から)
c. SK-5上層断面(北東から)
- 図版第38 a. SK-5完掘状況(南西から) b. A3号墳検出状況(北東から)
c. 同遺物検出状況(南西から)
- 図版第39 a. A3号墳石室根石状況(西北から) b. 同(南西から) c. 同(北東から)
- 図版第40 a. A3号墳根石抜取痕(北東から) b. 同(北西から) c. 同完掘状況(北東から)
- 図版第41 a. A3号墳出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第42 a. A3号墳出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第43 a. A3号墳出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第44 a. A3号墳出土遺物 b. 同 c. 同
- 図版第45 a. A3号墳出土鉄滓 b. 長尾原遺跡出土鉄鉱石 c. 同調査風景

第1図	邑南町域と遺跡位置図	3
第2図	馬場山遺跡・順庵原B遺跡・長尾原遺跡付近遺跡分布図	4
第3図	馬場山遺跡地形測量図	5
第4図	馬場山遺跡遺構配置図	6
第5図	SK-1実測図(1:40)	7
第6図	右縁・スクレーパー実測図(1:1)	7
第7図	SB-1実測図(1:40)	8
第8図	SB-2実測図(1:40)	9
第9図	SB-3実測図(1:40)	10
第10図	SB-4実測図(1:40)	11
第11図	SB-5実測図(1:40)	12
第12図	SB-6実測図(1:40)	13
第13図	SB-7実測図(1:40)	14
第14図	出土遺物実測図(1:3)	15
第15図	順庵原B遺跡周辺図(1:5000)	16
第16図	順庵原B遺跡遺構配置図	17
第17図	出土遺物実測図(1:3)	18
第18図	出土遺物実測図 石縁(1:1)、縄文土器(1:2)	19

第19図	SI-1実測図(1:60)	20
第20図	SI-1出土遺物実測図(1:3)	20
第21図	SI-2実測図(1:60)	21
第22図	SI-2出土遺物実測図(1:3)	22
第23図	SI-3・SD-4・SK-13・14(1:60)	23
第24図	SI-3出土遺物実測図(1:3)	24
第25図	SI-4実測図(1:60)	25
第26図	SI-4出土遺物実測図(1:3)	25
第27図	SB-1実測図(1:40)	26
第28図	SB-2実測図(1:60)	28
第29図	SD-1実測図(1:60)	29
第30図	SD-1出土遺物実測図(1:3)	29
第31図	SD-2実測図(1:40)	30
第32図	SD-4実測図(1:40)	30
第33図	SK-1実測図(1:40)	31
第34図	SK-1出土遺物実測図(1:3)	31
第35図	SK-2実測図(1:40)	32
第36図	SK-2出土遺物実測図(1:3)	32
第37図	SK-3実測図(1:40)	32
第38図	SK-3出土遺物実測図(1:3)	32
第39図	SK-3出土遺物(勾玉) 実測図(1:1)	33
第40図	SK-4・5・6実測図(1:40)	34
第41図	SK-7・8・9・10・11・12・13実測図(1:40)	35
第42図	長尾原遺跡地形測量図(1:1000)	36
第43図	長尾原遺跡造構配置図	37
第44図	SI-1・SD-1・2・SK-3実測図(1:60)	38
第45図	SI-1出土遺物実測図(1:3)	39
第46図	SD-1出土遺物実測図(1:3)	39
第47図	SD-3実測図(1:40)	39
第48図	SK-1・2実測図(1:40)	40
第49図	SK-4実測図(1:40)	41
第50図	SK-4出土遺物実測図(1:3)	41
第51図	SK-5実測図(1:60)	41
第52図	長尾原A3号墳実測図(1:40)	42
第53図	長尾原A3号墳出土遺物実測図①(1:3)	43
第54図	長尾原A3号墳出土遺物実測図②(1:2)	44
第55図	同③(1:3)	44
第56図	長尾原A3号墳出土遺物実測図④(1:2)	45
第57図	長尾原A3号墳出土金床石(1:6)	45
第1表	馬場山遺跡出土遺物観察表	60
第2表	鷺庵原B遺跡出土遺物観察表	60
第3表	長尾原遺跡出土遺物観察表	61

I. 馬場山遺跡、順庵原B遺跡、長尾原遺跡の位置と環境

島根県邑智郡邑南町は島根県のはば中央部の南部に位置し、平成16年10月1日に羽須美村、瑞穂町、石見町が合併し新たに誕生した町である。町域の東側が旧羽須美村、中央部が旧瑞穂町、西側が旧石見町で、面積419.2km²、人口約14,000人の中山間地域に位置する町である。

本報告書掲載の遺跡は旧瑞穂町地内（現瑞穂地区）に所在する。瑞穂地区は区域のはば中央を出羽川が東流し、その出羽川に向かって高水川、亀谷川、岩屋川、高見川等の支流が注いでいる。出羽川とその流域には狭小な沖積地や河岸段丘が形成されており、田所、出羽、高見付近では比較的幅広い段丘が存在し、段丘上には弥生時代から奈良時代を中心とする多くの遺跡が所在している。

調査を実施した馬場山遺跡は、下龜谷の出羽川右岸河岸段丘上の馬場山と呼称される丘陵頂上部付近に所在する。順庵原B遺跡は馬場山遺跡西側に広がる段丘上に位置し、国道261号を挟んで西側に弥生時代の四隅突出型墳丘墓順庵原1号墓が所在する。長尾原遺跡遺跡は馬場山遺跡や順庵原B遺跡の北東約1km付近に広がる長尾原と呼ばれる段丘上に広がる邑智郡内で最大級の遺跡である。

ところで、邑南町内の遺跡は『島根県遺跡地図Ⅱ（石見篇）^①』によると、約950箇所の遺跡が確認されており、その内の約600箇所が瑞穂地区に所在する。それらの遺跡の多くは、中世から近世にかけての製鉄遺跡であるが、時期的には旧石器時代から、歴史時代に至る遺跡も数多く所在する。

旧石器時代の遺跡では、横道遺跡^②（高見）、坂根谷遺跡^③（高見）、荒横遺跡^④（岩屋）、堀田上遺跡^⑤（市木）が上げられる。横道遺跡は、出羽川沿い低丘陵に位置し、1982年の詳細分布調査で始良Tn火山灰の下から流紋岩製石核、剥片類が出土している。遺構等は明らかではないが、後期旧石器時代前半の石器群が存在するとと思われる。また、本遺跡は県内で初めて旧石器時代文化層が確認された遺跡でもある。また、荒横遺跡では、昭和23年に開墾作業中赤土の中から尖頭器状石器とスクレーパーがそれぞれ1点採取されており、県内初の発見例として知られている。

次に縄文時代の遺跡では、横道遺跡、坂根谷遺跡、川ノ免遺跡^⑥（山出）、郷路橋遺跡^⑦（市木）、堀田上遺跡^⑧などが知られている。横道遺跡では縄文時代早期の押型文土器や織維土器、縄文時代前期の刺突文、条痕文土器や石器や石族、スクレーパーなどが出土している。郷路橋遺跡では縄文早期から晩期の土器や石器、住居跡と考えられるピット群が出土している。

堀田上遺跡は、丘陵の南斜面から縄文時代早期の住居跡や押型文土器や石器、磨石、石皿などが出土しており、縄文時代になると町内の各地で人々が生活し始めたことがうかがえる。

弥生時代の遺跡には、野田西遺跡^⑨（上龜谷）、牛塚原遺跡^⑩（上龜谷）、大金屋遺跡^⑪（上龜谷）、淀原遺跡（淀原）、順庵原A・B遺跡、石堂遺跡（和田）、長尾原遺跡^⑫（下龜谷）、川ノ免遺跡^⑬、滑遺跡（山田）、沢陸遺跡^⑭（淀原）、宮原遺跡^⑮（伏谷）、段の原遺跡（高見）などが知られている。弥生時代前期から中期にかけての遺跡としては、牛塚原遺跡、順庵原遺跡、長尾原遺跡、大金屋遺跡などが知られており、長尾原遺跡や沢陸遺跡では弥生時代中期の竪穴住居跡が発見されている。竪穴住居跡は直徑6m前後の円形を呈し、床面中央に土坑状のピットを設けている。これらの遺跡は出羽盆地の南側の段丘上に位置しており、弥生時代の農耕が、沖積地をのぞむ湧水地点に近いと

ころから始まったことを示しているといえる。

弥生時代後期になると、川ノ免遺跡や隣接する滑遺跡をはじめ多くの遺跡が出羽川両岸に位置する段丘上や流域各地に分布するようになる。順庵原A・B遺跡では、順庵原1号墓近くで直径約9mの島根県下最大級の堅穴住居が発見され、1号墓との関わりが注目されている⁴⁶。

順庵原1号墓は、国内初の発見例となった四隅突出型墳丘墓で、10×8mの墳丘上には箱式石棺墓2基、木棺墓1基の3つの主体がつくられており、主体内部や墳丘周辺の溝からガラス小玉や弥生土器が出土している。墳丘袖壠には粘土が運ばれ、周溝内にはストーン・サークル状遺構もみられる⁴⁷。このような墳墓の出現は、農耕社会の進展とともに、階層の分化が始まった結果、共同体の首長墓としての墳丘が築かれたことを示している。また、御華山墳墓（鱒淵）は、長さ28m、幅15mの墓坑の中に箱式石棺が築かれており、人骨や弥生土器が出土している⁴⁸。いずれも弥生時代後半から古墳時代にかけての墳墓と推定される。

古墳時代になると遺跡はさらに増えてくる。集落関係の遺跡では、今佐屋山遺跡⁴⁹、川ノ免遺跡⁵⁰、宇山遺跡（上原）、狼原遺跡（和田）などがある。

1989年に調査された今佐屋山遺跡では古墳時代後期の住居跡3棟や土坑墓、製鉄関連遺構1基が検出されている。

いずれも、方形で壁の一辺にカマドが設置されている。製鉄炉は、1号堅穴住居の少し手前にあり、炉床部と上坑からなる。遺構の検出状況や炉内残留滓から炉形は隅丸長方形で45×38cmの箱型炉と推定される。1992年に調査された川ノ免遺跡では3.6×2.9mの方形の堅穴住居が検出されている。出土遺物から古墳時代中期と考えられている。

瑞穂地区では60基以上の古墳が確認されている。古墳時代前期と推定されるものは20基以上からなる鱒淵古墳群⁵¹（鱒淵）や、御華山古墳群⁵²、坂根谷古墳群（高見）などがある。いずれも直径10m前後の円墳や方墳で、中には無墳丘のものもあるといわれている。小形の堅穴式石室を内部構造とする段の原古墳（高見）も古墳時代前半期のものと思われる。古墳時代後半期になると、丘陵斜面に横穴式石室を内部埋葬施設とする直径10m前後の円墳が築かれる。牛塚市墳群（上龟谷）、杉谷古墳群（下龟谷）、石堂古墳群（和出）長尾原A古墳群（下龟谷）、などがある。また、江迫横穴墓群（淀原）などのように、丘陵斜面に横から穴を掘り込んで墓室をつくった横穴墓もつくられてくる⁵³。

歴史時代の遺跡としては、古代の須恵器窯跡群の他、中世の山城跡や製鉄遺跡がある。

山城では鎌倉時代に富水（出羽）氏が築城したと伝えられる。ツ山城跡をはじめ高橋氏の本城、別当城跡など多くの山城跡や砦跡が確認されている。また、中近世の製鉄関係遺跡では、製錬場であるタタラ跡や大鉱治場跡が多く分布し、その数は300箇所以上にも及ぶ。また、砂鉄採集の鉄穴場跡や切羽などが地区全域に分布しており、製鉄が盛んに行われていたことがうかがえる。

注

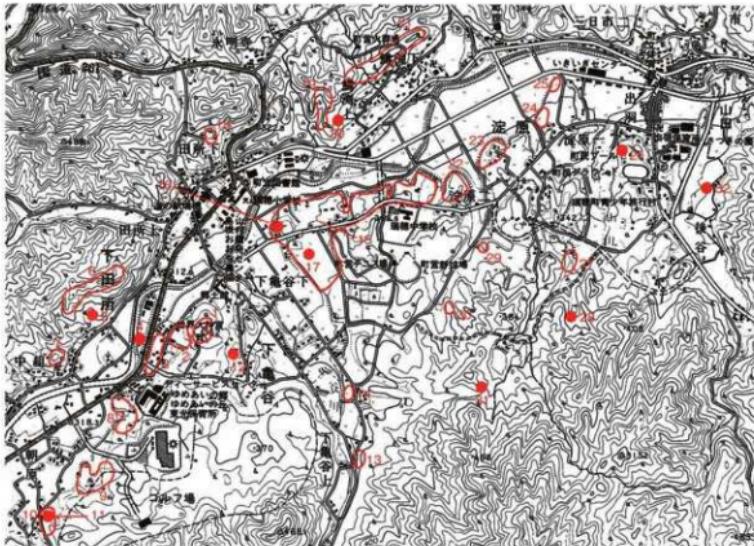
- (1) 島根県教育委員会「島根県遺跡地図II」（石見編）。2002年3月。
- (2) 河瀬正利「横道遺跡－詳細説明分布図調査報告書－」瑞穂町教育委員会1982年。
- (3) 瑞穂町教育委員会「坂根谷遺跡発掘調査報告書」2002年3月。
- (4) 吉川正「瑞穂の遺跡」『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会。

- (5) 島根県教育委員会『主要地方道接浜田八重木部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－堀田上・今佐附山・米尻山道路の調査』1991年3月。
- (6) 瑞穂町教育委員会『川ノ免発掘調査報告書』1996年3月。
- (7) 島根県教育委員会『海路橋道路』「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1991年3月。
- (8) 前掲註(5)。
- (9) 瑞穂町教育委員会『いにしえの瑞穂－水明カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査概報－』1995年3月。
- (10) 前掲註(4)。
- (11) 前掲註(9)。
- (12) 前掲註(4)。
- (13) 前掲註(6)。
- (14) 瑞穂町教育委員会『沢鹿遺跡発掘調査報告書』1996年10月。
- (15) 瑞穂町教育委員会『宮原遺跡詳細分布調査報告書』1996年3月。
- (16) 瑞穂町教育委員会『町内遺跡発掘調査等報告書』2000年3月。
- (17) 前掲註(4)。
- (18) 円脇俊彦『御幸山弥生式墳墓調査概報』瑞穂町教育委員会1962年2月。
- (19) 前掲註(5)。
- (20) 前掲註(6)。
- (21) 瑞穂町教育委員会『跡浦4号墳発掘調査報告書』1991年3月。
- (22) 前掲註(3)。
- (23) 前掲註(4)。

なお、上記参考文献以外に『瑞穂町誌』第1集1964年、第2集1966年を参考にした。



第1図 岳南町域と遺跡位置図



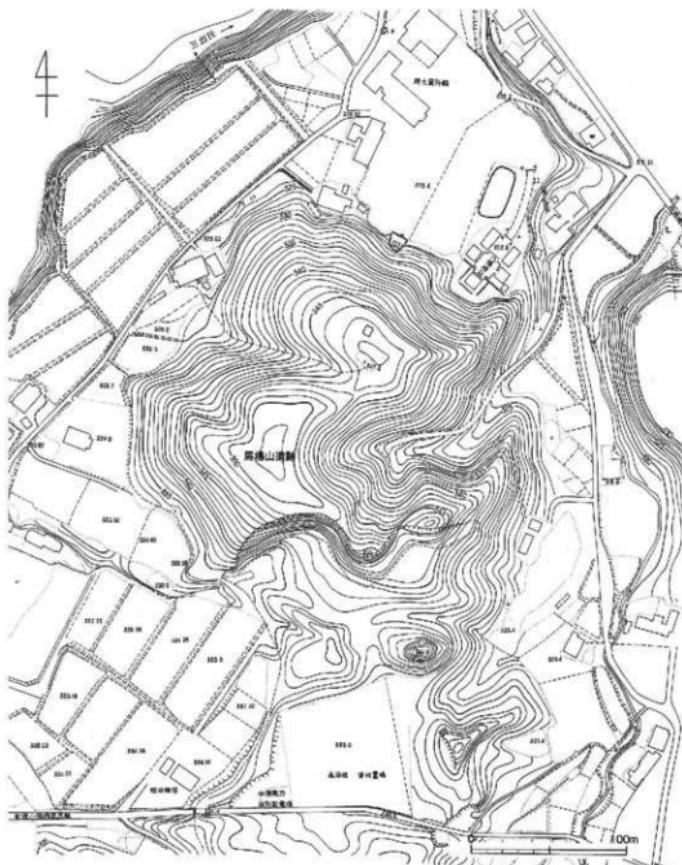
第2図 馬場山遺跡・順庵原A遺跡・順庵原B遺跡・長尾原遺跡付近遺跡分布図 (1:25000)

- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1. 馬場山遺跡 | 12. 牛市原遺跡 | 23. 淀原遺跡 |
| 2. 順庵原A遺跡 | 13. 杉谷古墳群 | 24. オセド遺跡 |
| 3. 順庵原B遺跡 | 14. 杉谷遺跡 | 25. 小絵堂遺跡 |
| 4. 順庵原1号墓 | 15. 長尾原遺跡 | 26. 旅行村窯跡 |
| 5. 南遺跡 | 16. 長尾原B古墳群 | 27. 沢陸遺跡 |
| 6. 南古墳群 | 17. 長尾原A古墳群 | 28. 滝ヶ谷窯跡 |
| 7. 神宮遺跡 | 18. 増屋横穴墓 | 29. 江迫横穴墓群 |
| 8. 出張遺跡 | 19. 御華山古墳群 | 30. 江迫窯跡 |
| 9. 野田西遺跡 | 20. 竹前遺跡 | 31. 後鉄穴窯跡 |
| 10. 牛塚原遺跡 | 21. 鰐淵古墳群 | 32. 小谷遺跡 |
| 11. 牛塚古墳群 | 22. 若林遺跡 | |

II. 馬場山遺跡の調査の概要

(1) 調査にいたる経緯

馬場山遺跡は周知の遺跡ではなかったが、周囲には弥生時代を中心とする順庵原A・B遺跡や順庵原1号墓、古墳時代の集落跡と考えられる牛市原遺跡が所在することなどから、遺跡が存在するであろうことが以前から想定されていた地である。今回の発掘調査は、この馬場山丘陵一帯に、宗教法人宇宙神道惟神道産土会が大八州神宮（現世界大神宮）の建設を計画されたことにより、遺跡の有無の確認調査を実施したことが端緒である。試掘によりピットや弥生時代の土器が発見さ



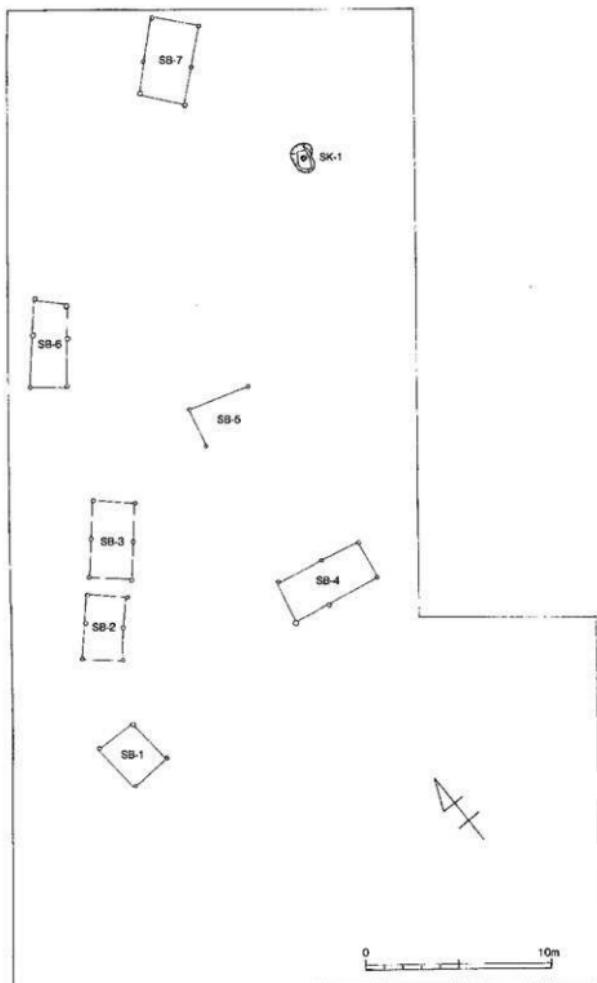
第3図 馬場山遺跡地形測量図

れ、遺跡の存在が明らかとなった。調査の結果に基づいて宗教法人と遺跡の取り扱いを協議した
が、宗教上の理由により計画変更をすることは無理との結論に達し発掘調査を実施した。

調査地 邑智郡邑南町下亀谷地内

調査期間 平成3年4月17日～8月31日

調査面積 約1,300m²



第4図 馬場山遺跡遺構配置図

(2) 繩文時代の遺構と遺物

落とし穴と思われる土坑と石鏃1点、スクレーパー1点が出土した。

a. SK-1(第5図、図版第1c、2a)

調査区北東端に位置する。断面は南北側中央付近がオーバーハング状に掘削されている。底部中央ピットは逆茂木痕と推定される。

平面形・規模

不正形な橢円で底部は長方形。上幅 $1.6 \times 1.0\text{m}$ 、底部 $1.05 \times 0.6\text{m}$ 、深さ 1.3m 。

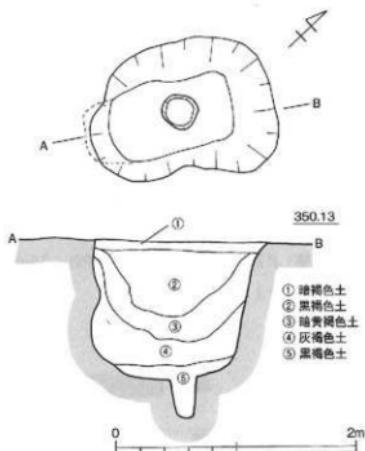
備考

底部中央にピット 径 30cm 深さ 32cm

b. 遺物(第6図、第1表、図版第4c)

石 鏃

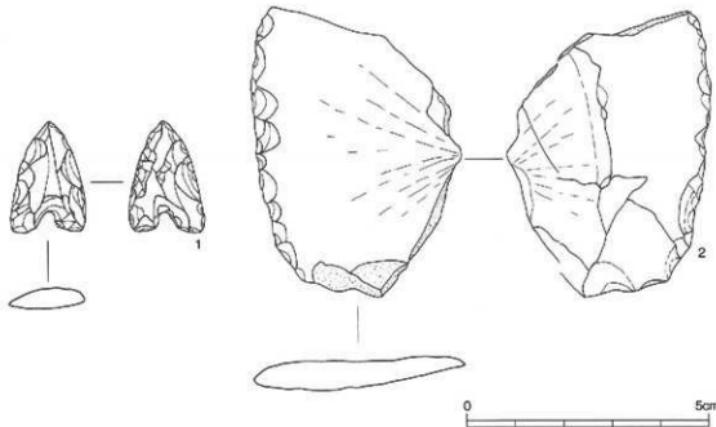
調査区中央西側SB-3付近で出土。凹無茎式で抉りが深く、逆U字状を呈している。石材は安山岩で全長 2.3cm 、幅 1.6cm 、厚さ 4mm と小型である。



第5図 SK-1実測図 (1:40)

スクレーパー

SB-1の南東 6m 付近で出土。形状は不正形な台形で刃部は 5.9cm 、幅 4.4cm 、厚さ 6mm で石材は安山岩である。



第6図 石鏃・スクレーパー実測図 (1:1)

(3) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代後期前半の掘立柱建物跡を7棟と多くのピットを検出したが、堅穴住居跡などは検出されていない。出土遺物は弥生時代後期前半（V-2）を中心とする土器が164点で量は少ない。

a. SB-1 (第7図、図版第2b)

調査区内では最も南西側に位置する。軸線方向はN-85°-W、7棟の内最も規模の小さい掘立柱建物跡である。

平面形・規模 ほぼ正方形、1間×1間（2.7×2.3m）、床面積6.2m²。

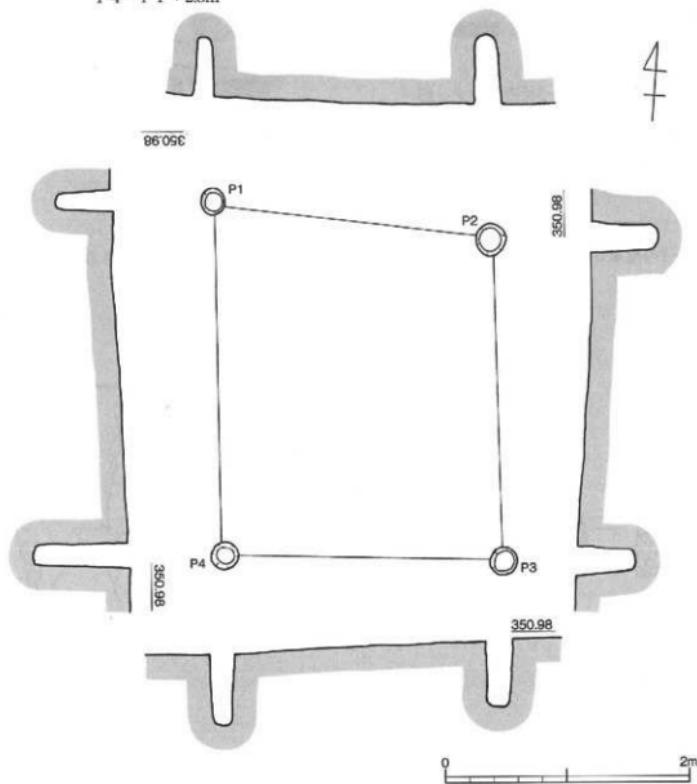
柱 穴 4本。

柱 穴 の 規 模 P1：径20~21cm 深さ46cm、P2：径25cm 深さ54cm

P3：径22~23cm 深さ51cm、P4：径21~25cm 深さ59cm

柱 穴 間 距 離 P1～P2：2.3m、P2～P3：2.6m、P3～P4：2.3m

P4～P1：2.8m



第7図 SB-1実測図 (1:40)

b. SB-2 (第8図、図版第2c)

SB-1の北4mに位置し、長軸方向はN-40°-Eである。

平面形・規模 長方形、2間×1間 (3.5×2.2m)、床面積7.7m²。

柱 穴 6本。

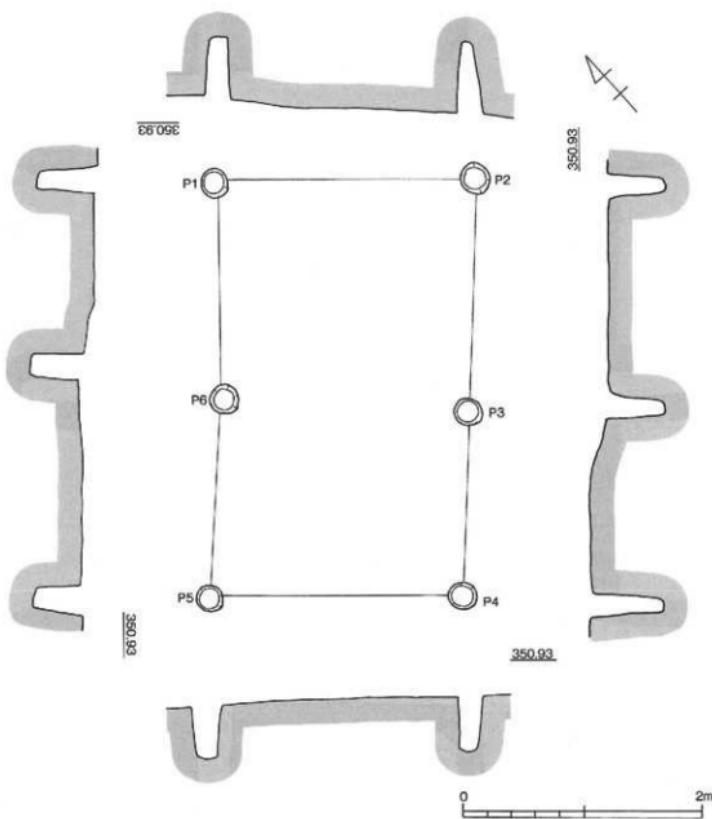
柱穴の規模 P1: 径22~24cm 深さ49cm、P2: 径22~25cm 深さ60cm

P3: 径21~23cm 深さ50cm、P4: 径23cm 深さ49cm

P5: 径23cm 深さ42cm、P6: 径23~24cm 深さ44cm

柱穴間距離 P1~P2: 2.2m、P2~P3: 1.9m、P3~P4: 1.5m

P4~P5: 2.1m、P5~P6: 1.7m、P6~P1: 1.8m



第8図 SB-2実測図 (1:40)

c. SB-3 (第9図、図版第3a)

SB-2の北東に近接して位置し、建物間距離は1mで、長軸方向N-39°-Eである。

平面形・規模 長方形、2間×1間(4.2×2.3m)、床面積9.7nf。

柱 穴 6本。

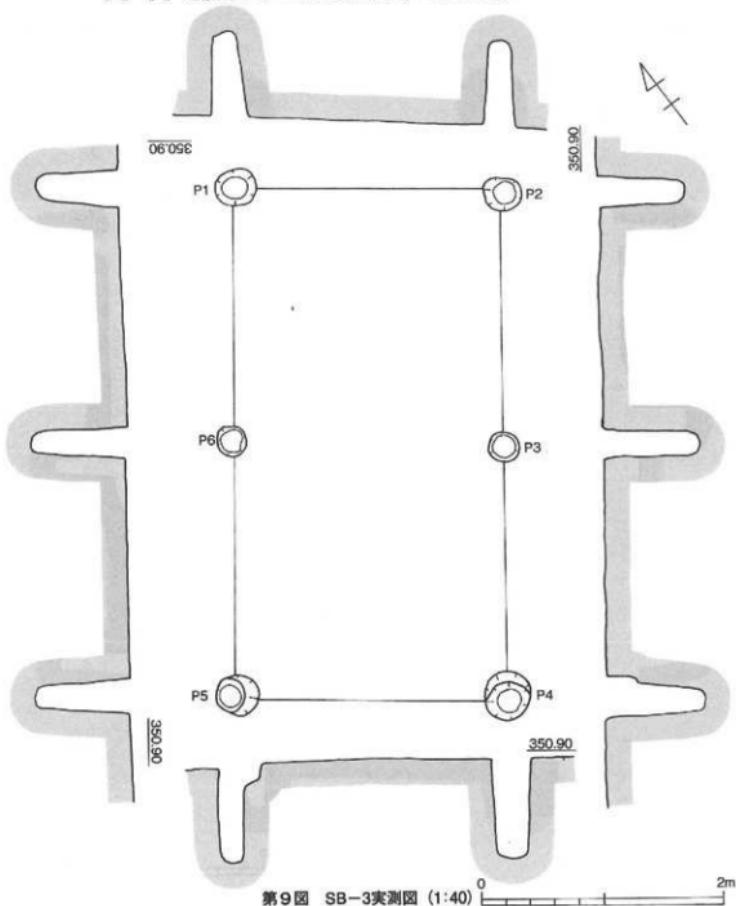
柱穴の規模 P1: 径30~35cm 深さ69cm、P2: 径26~33cm 深さ71cm

P3: 径23~25cm 深さ80cm、P4: 径31~35cm 深さ81cm

P5: 径24~28cm 深さ78cm、P6: 径25cm 深さ78cm

柱穴間距離 P1~P2: 2.3m、P2~P3: 2.1m、P3~P4: 2.1m

P4~P5: 2.3m、P5~P6: 2.1m、P6~P1: 2.1m



第9図 SB-3実測図 (1:40)

d. SB-4 (第10図、図版第3b)

SB-2の南東9mに位置する。長軸方向E-10°-Sである。検出された掘立柱建物跡では最大規模である。

平面形・規模 長方形、2間×1間 (4.8×2.3m)、床面積11m²。

柱 穴 6本。

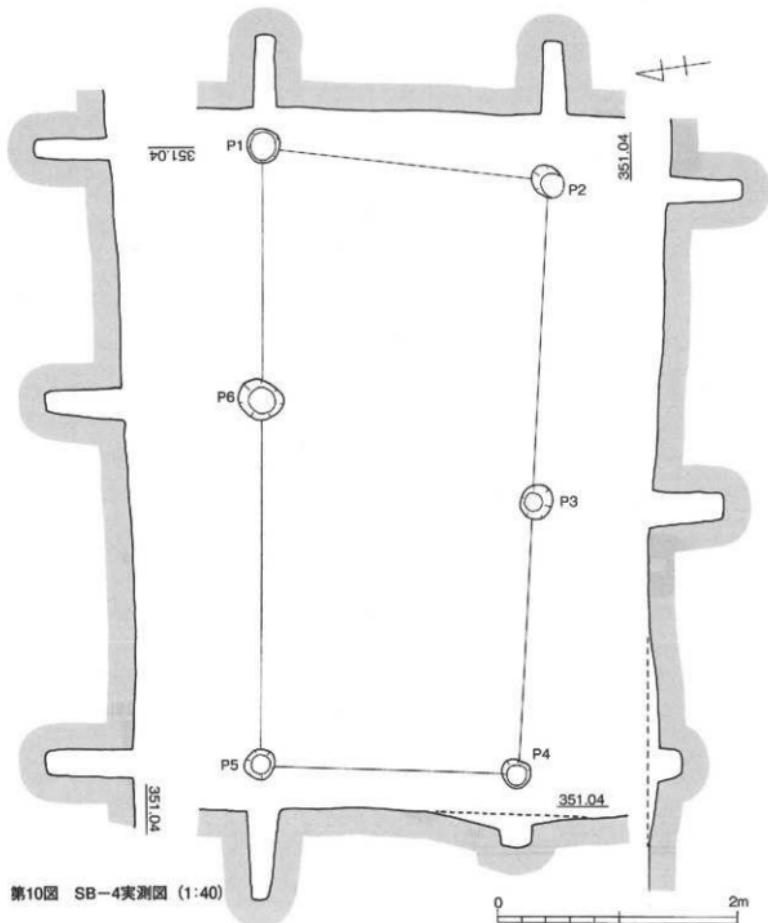
柱穴の規模 P1: 径28~29cm 深さ60cm、P2: 径20~23cm 深さ61cm

P3: 径30~35cm 深さ52cm、P4: 径25~27cm 深さ30cm

P5: 径25~26cm 深さ62cm、P6: 径33~39cm 深さ53cm

柱穴間距離 P1~P2: 2.4m、P2~P3: 2.6m、P3~P4: 2.2m

P4~P5: 2.1m、P5~P6: 3.0m、P6~P1: 2.1m



第10図 SB-4実測図 (1:40)

e. SB-5 (第11図、図版第3c)

調査区のはば中央で、SB-4の北側8mに位置する。長軸方向E-15°-Sである。調査では柱穴を3本しか確認できなかつたが、規模は1間×1間、1間×2間が想定できる。

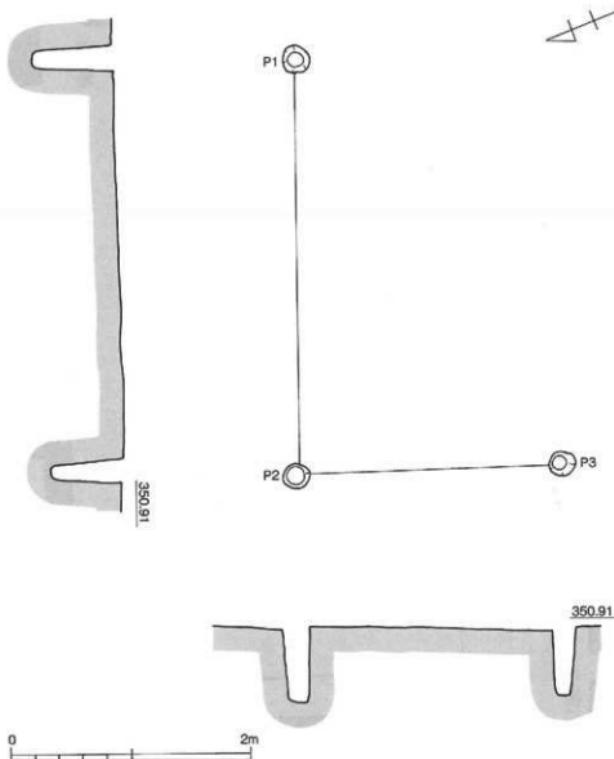
平面形・規模 長方形?、1間×1間? (3.4×2.2m) または1間×2間。

柱 穴 3本。

柱 穴 の 規 模 P1: 径22~25cm 深さ67cm、P2: 径22~23cm 深さ61cm

P3: 径21~24cm 深さ55cm

柱 穴 間 距 離 P1~P2: 3.4m、P2~P3: 2.2m



第11図 SB-5実測図 (1:40)

f. SB-6 (第12図、図版第4a)

SB-3の北7mに位置する。長軸方向N-40°-Eである。

平面形・規模 ややいびつな長方形、2間×1間 (4.6×1.9m)、床面積は8.7m²である。

柱 穴 6本。

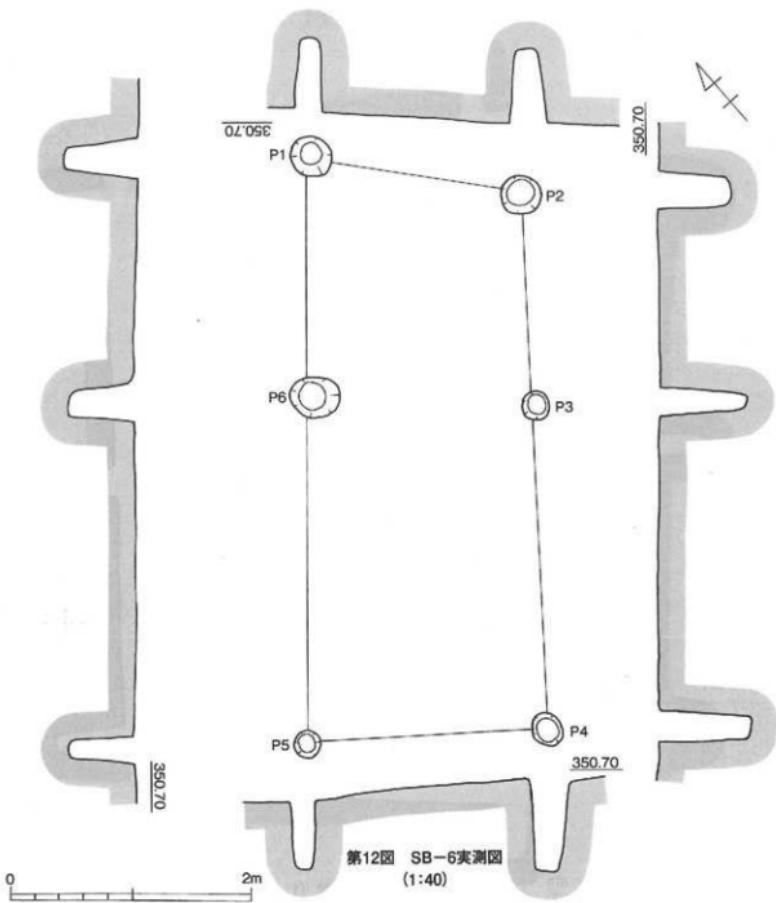
柱穴の規模 P1 : 径33~34cm 深さ52cm、P2 : 径31~33cm 深さ58cm

P3 : 径22~25cm 深さ72cm、P4 : 径25~28cm 深さ85cm

P5 : 径21~22cm 深さ55cm、P6 : 径33~40cm 深さ55cm

柱穴間距離 P1~P2 : 1.8m、P2~P3 : 1.7m、P3~P4 : 2.7m

P4~P5 : 2.0m、P5~P6 : 2.8m、P6~P1 : 2.0m



g. SB-7 (第13図、図版第4b)

調査区の最も北側に位置し、SB-6の北東12mに位置する。長軸方向N-45°-Eで、検出された掘立柱建物跡ではSB-4に次いで2番目の大きさである。

平面形・規模 長方形、2間×1間 (4.5×2.2m)、床面積9.9m²。

柱 穴 6本。

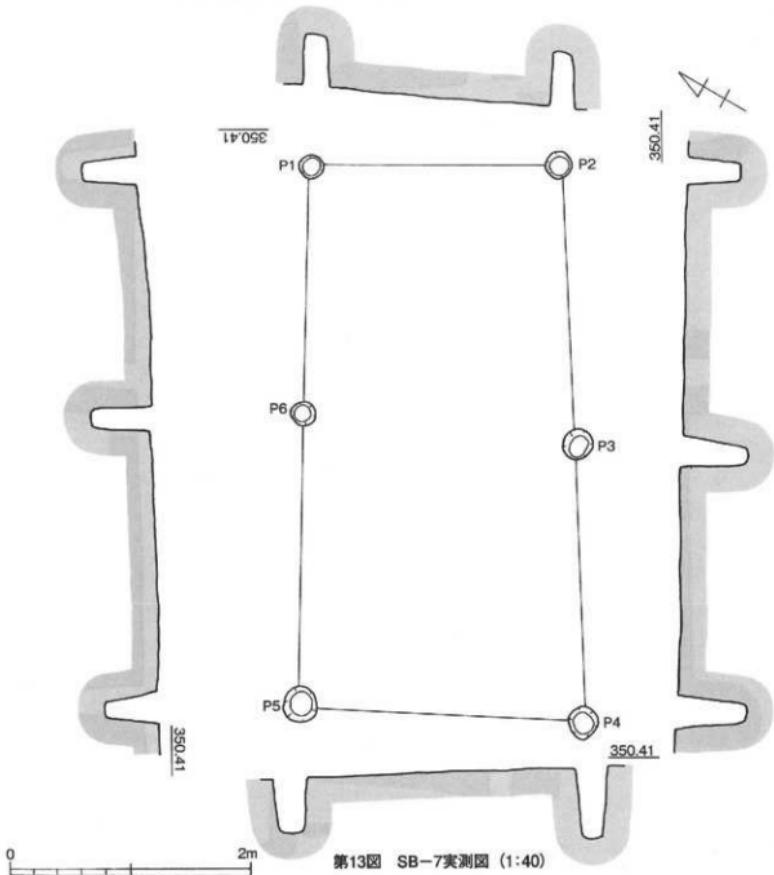
柱穴の規模 P1 : 径20~21cm 深さ42cm、P2 : 径20~22cm 深さ45cm

P3 : 径25cm 深さ54cm、P4 : 径26~27cm 深さ59cm

P5 : 径23~27cm 深さ46cm、P6 : 径19~20cm 深さ42cm

柱穴間距離 P1~P2 : 2.1m、P2~P3 : 2.3m、P3~P4 : 2.3m

P4~P5 : 2.3m、P5~P6 : 2.4m、P6~P1 : 2.0m



第13図 SB-7実測図 (1:40)

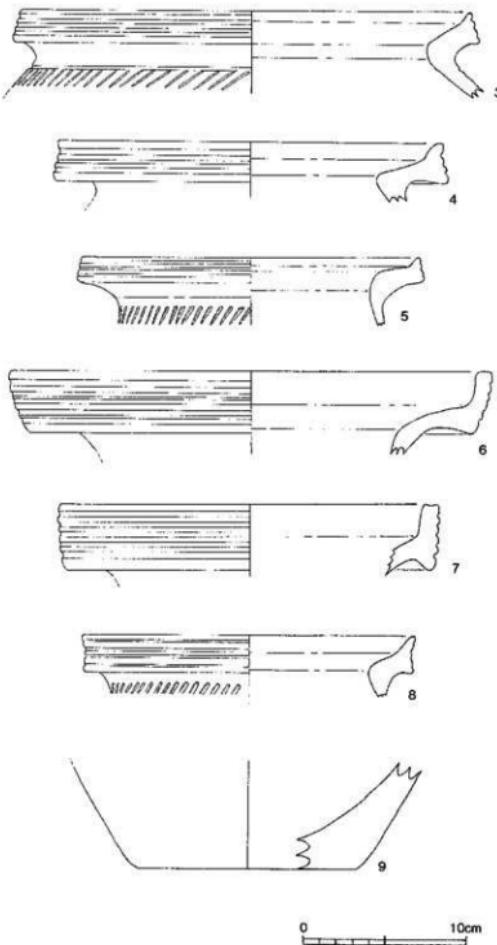
h. 出土遺物（第14図、第1表、図版第5a, b）

弥生時代後期前半（V-2）の土器が出土したが、出土数は164点で量は少ない。出土位置は調査区南西端と調査区中央付近から北西端に集中していた。出土遺物は小片が多く、風化が激しく完形品や復元可能な土器は皆無である。土器は口縁部直立または僅かに外傾し口縁外面に凹線文を施すものが多い。

（4）小結

縄文時代の落し穴1基と、弥生時代後期前半の掘立柱建物群を検出した。掘立柱建物跡以外には弥生時代の遺構を検出しておらず、馬場山頂上付近が倉庫群のエリアとして使用されたのかもしれない。

縄文時代の落し穴は石見部での発見例はほとんど無く、縄文時代の狩猟方法を考える上で貴重な発見となつたが、共伴する遺物が出土しておらず時期は不明である。弥生時代の掘立柱建物跡は7棟検出した。これらは建物の軸線の方向から2つのグループに分けることができ、SI-1, 4, 5はほぼ東西方向（A群）で、SB-2, 3, 6, 7が北東方向（B群）である。柱穴の規模もB群が少し大きく、時期差があるのではないかと考えられるが先後関係は不明である。



第14図 出土遺物実測図（1:3）

III. 順庵原B遺跡の調査概要

(1) 調査に至る経緯

順庵原B遺跡は出羽川右岸の河岸段丘上に位置し、四隅突出型墳丘墓「順庵原1号墓」に近接する弥生時代を中心とする遺跡である。以前から弥生時代の土器や石包丁などが表探され、邑南地域を代表する遺跡として知られていた。本遺跡の周辺は旧瑞穂町の西部地区の福祉の拠点として特別養護老人ホームやケアハウスなどが建設されてきた。また、新たにデイサービスの建設が予定され、これらの施設への進入路の整備が急務となり、町道淀原小河内線の改良工事が行われることになり、工事に先立って工事予定地内の発掘調査を実施した。

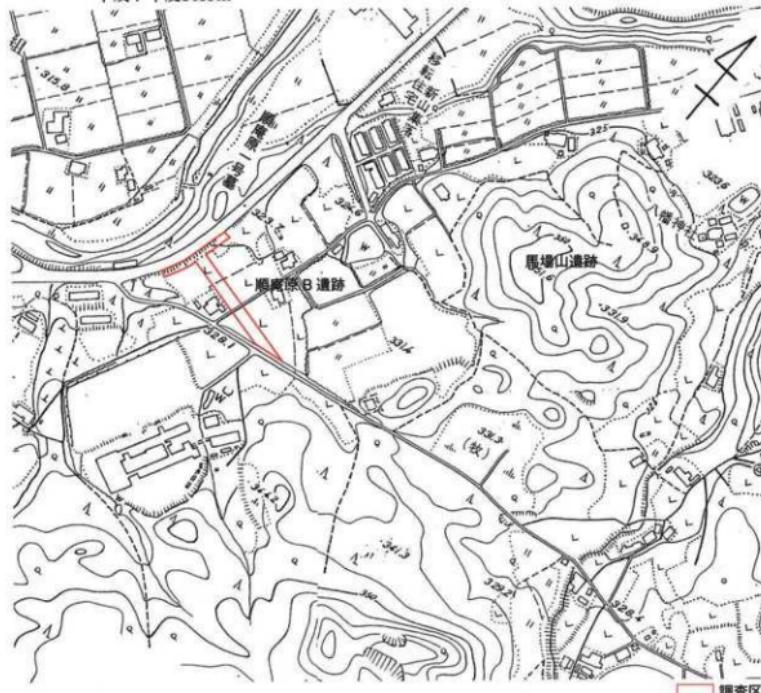
調査地 邑智郡邑南町下龜谷地内

調査期間 平成6年11月10日～12月24日

平成7年5月8日～8月31日

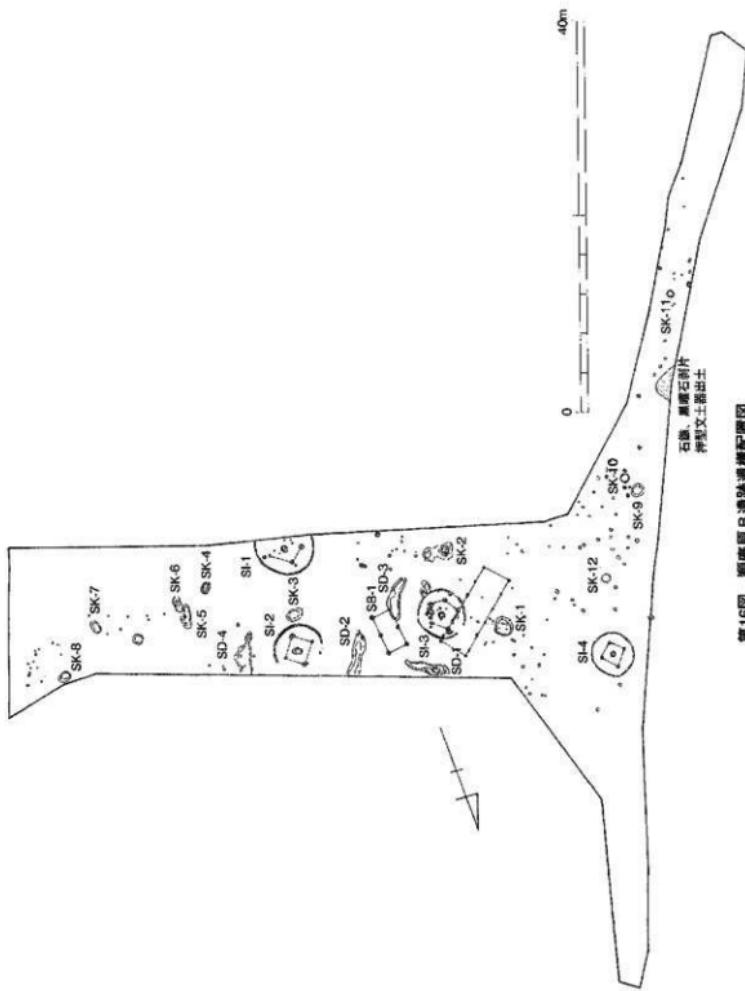
調査面積 平成6年度1050m²

平成7年度1415m²



第15図 順庵原B遺跡周辺図 (1:5000)

第16図 潮庭原B遺跡遺構配置図



(2) 平成6年度の調査 (第17図、第2表、図版第5c~6b)

道路改良予定地内1050m²を調査したが、戦前戦後の開墾により削平されており遺構は検出されなかった。土器は約200点出土したが、近年トラクターによる起耕が行われ、ほとんどの土器が碎片となっており実測できるものは非常に少なかった。土器は碎片であるが、器壁が薄く丁寧にミガキが施された中期に属するものや、後期の前半に属するものがほとんどで須恵器は出土していない。これらのことから、弥生時代中期後半から弥生時代後期前半にかけての集落が存在していたと考えられるが、完全に削平されており調査区内で遺構は発見されていない。

(3) 出土遺物

実測できる9点を図化した。

(4) 平成7年度の調査

平成6年度調査区の北西に位地し、道路改良予定地内1415m²を調査した。平成6年度の調査区は開墾により完全に削平されていたが、本調査区では、縄文土器片や、石鎌、弥生時代の竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、土坑等検出した。調査区の基本層序は耕作土、黒褐色土、黄褐色土地山である。

(5) 縄文時代の遺物 (第18図、第2表、図版第7c・8a)

SK-12の南西約15~25mの位置で黒曜石の剥片308点、安山岩の剥片196点とともに黒曜石の石鎌9個、安山岩製石鎌4点の他、押型文土器片が出土したが、遺構は確認されていない。石鎌は9点、押型文土器の碎片2点を図化した。

(6) 弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡と掘立柱建物跡

a. SI-1 (第19・20図、第2表、図版第8b ~9c)

調査区南側に位置する。遺構の1/2が調査区外であるが本調査区内では最大規模の竪穴住居跡である。

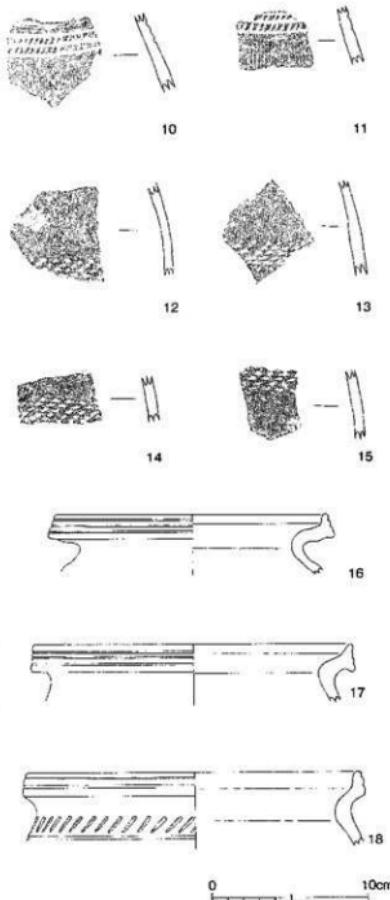
平面形・規模 円形、復元直徑6.0m。

柱 穴 3本 (本来は5本か)?

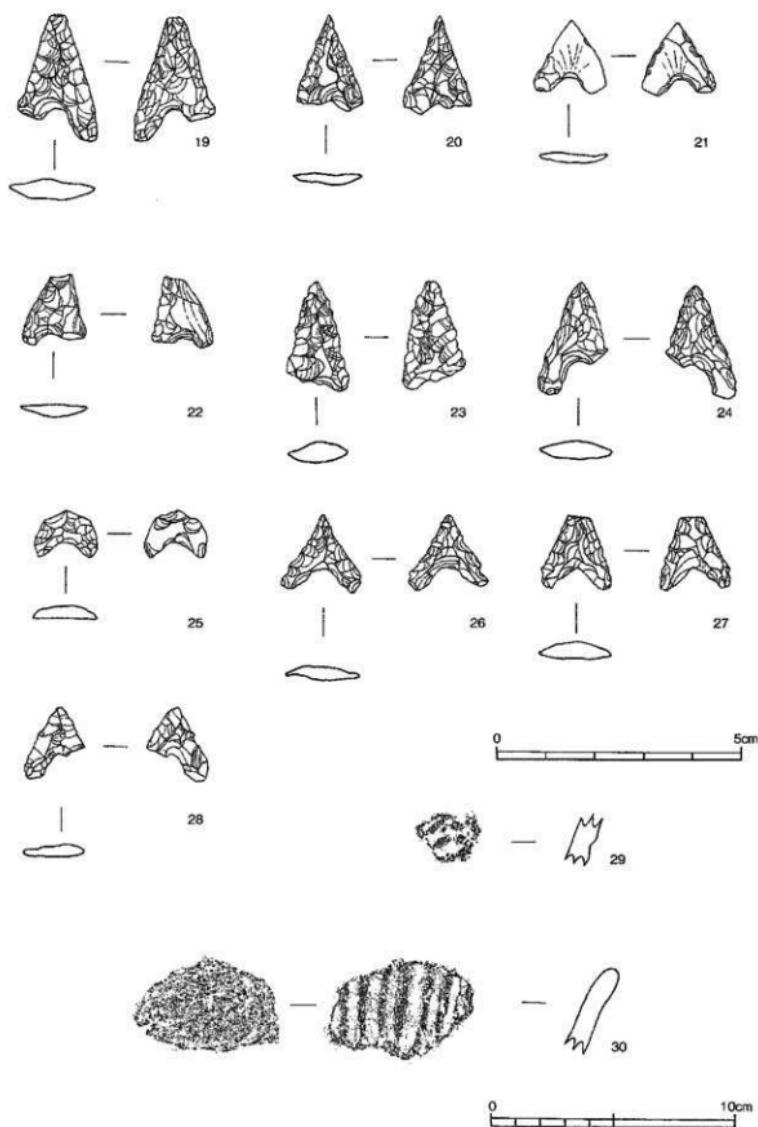
柱穴の規模 P1 : 径27~30cm、深さ59cm

P2 : 径30~45cm、深さ50cm

P3 : 径39~46cm、深さ57cm



第17図 出土遺物実測図 (1:3)



第18図 出土遺物実測図 石器（1:1）、縄文土器（1:2）

柱穴間距離 P1～P2 : 2.50m

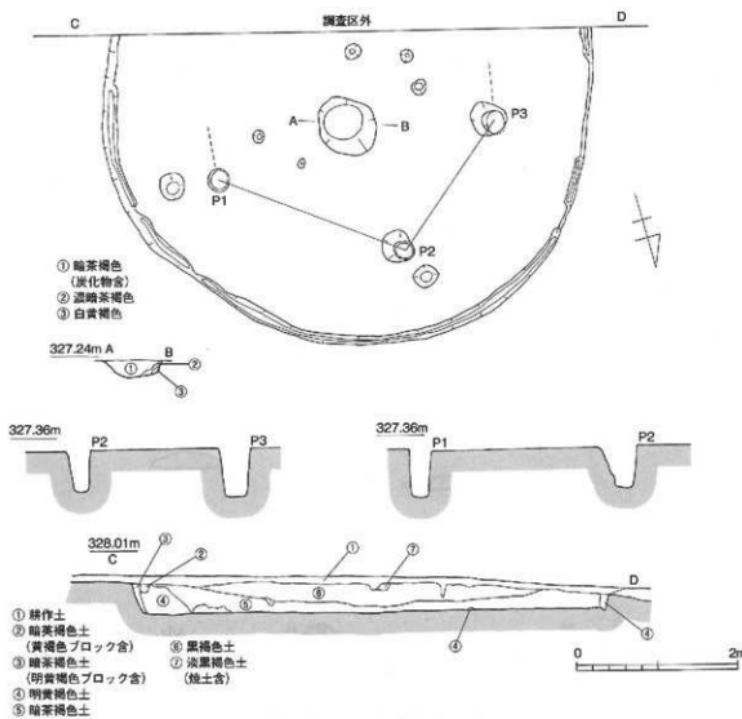
P2～P3 : 1.95m

屋内施設 床面のはば中央に楕円形で80×70cm、深さ22cmの土坑で炭化物を含む。

残存量高 最大38cmで、壁に沿って幅3～8cm、深さ3～5cmの壁溝が巡る。

出土遺物 弥生土器片小量、2点同化。

時代 弥生時代中期後半。



第19図 SI-1実測図 (1:60)



第20図 SI-1出土遺物実測図 (1:3)



b. SI-2 (第21・22図、第2表、図版第9c~12a)

SI-1の北5mに位置する。

平面形・規模　円形であるが、北側の壁面は消滅している。直径約4.8m。

柱 穴 4 条。

柱穴の規模 P1：径24~30cm、深さ70cm、P2：径43~60cm、深さ40cm

P3：径30~37cm、深さ60cm、P4：径40~42cm、深さ32cm

柱穴間距離 P1~P2 : 220m, P2~P3 : 235m, P3~P4 : 205m

P4≈P1 : 240m

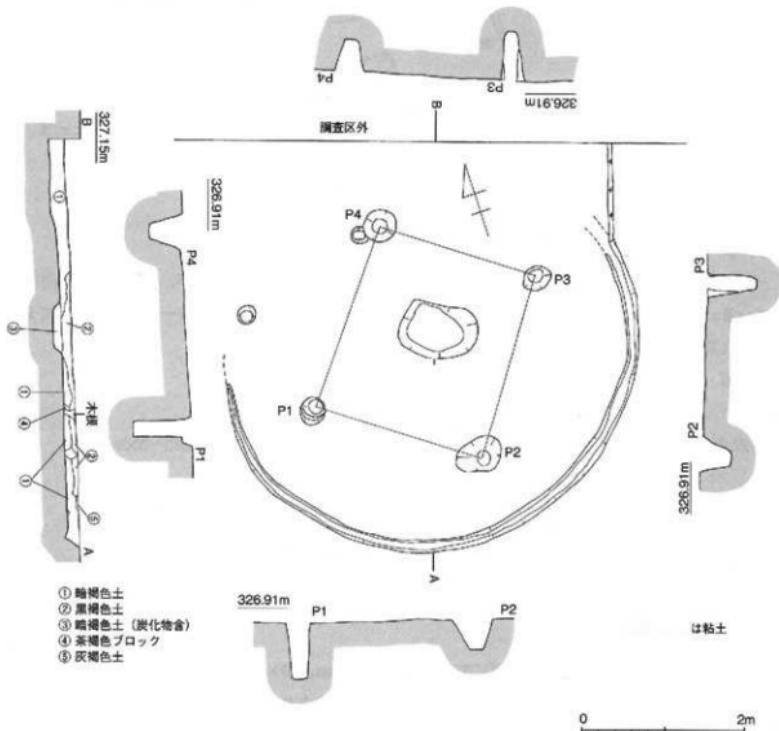
屋内施設 床面は中央部に不正形な複凹で、 $70 \times 95\text{cm}$ 、深さ10cmの土坑で炭化物を含む。

残存巖高、南側で最大17cm、壁に沿って幅6~12cm、深さ5~6cm壁溝が巡る。

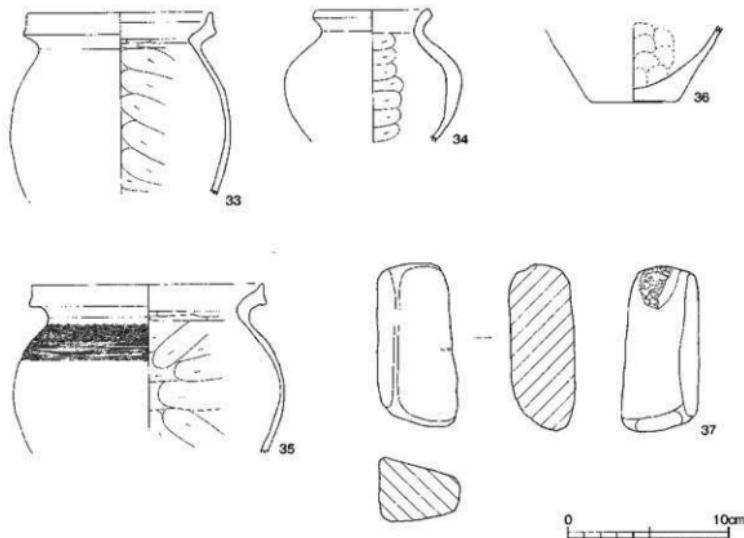
備考 SD=2, SD=4はSI=2の間違と推定される。

出土遺物 弥生土器片小量と砥石。

時 代 弥生後期前半



第21図 SI-2実測図 (1:60)



第22図 SI-2出土遺物実測図 (1:3)

c. SI-3 (第23・24図、第2表、図版第12b~14a)

SI-2の西約10mに位置する。本住居跡は当初径4.2mの竪穴住居であったが、径4.8mに拡張されている。柱は当初の位置から変わっていない。床面から炭化した建築部材の一部が検出されており、火災を被った可能性がある。

平面形・規模 円形、当初の径約4.2m、拡張後の径約4.8m。

柱 穴 5本、柱穴の隙間を粘土で充填。

柱 穴 の 規 模 P1：径40cm、P2：径35~45cm、P3：径35~38cm、P4：径45~55cm

P5：径43~50cm

柱 穴 間 距 離 P1~P2：2.10cm、P2~P3：1.75cm、P3~P4：1.95cm

P4~P5：1.5cm、P5~P1：1.65cm

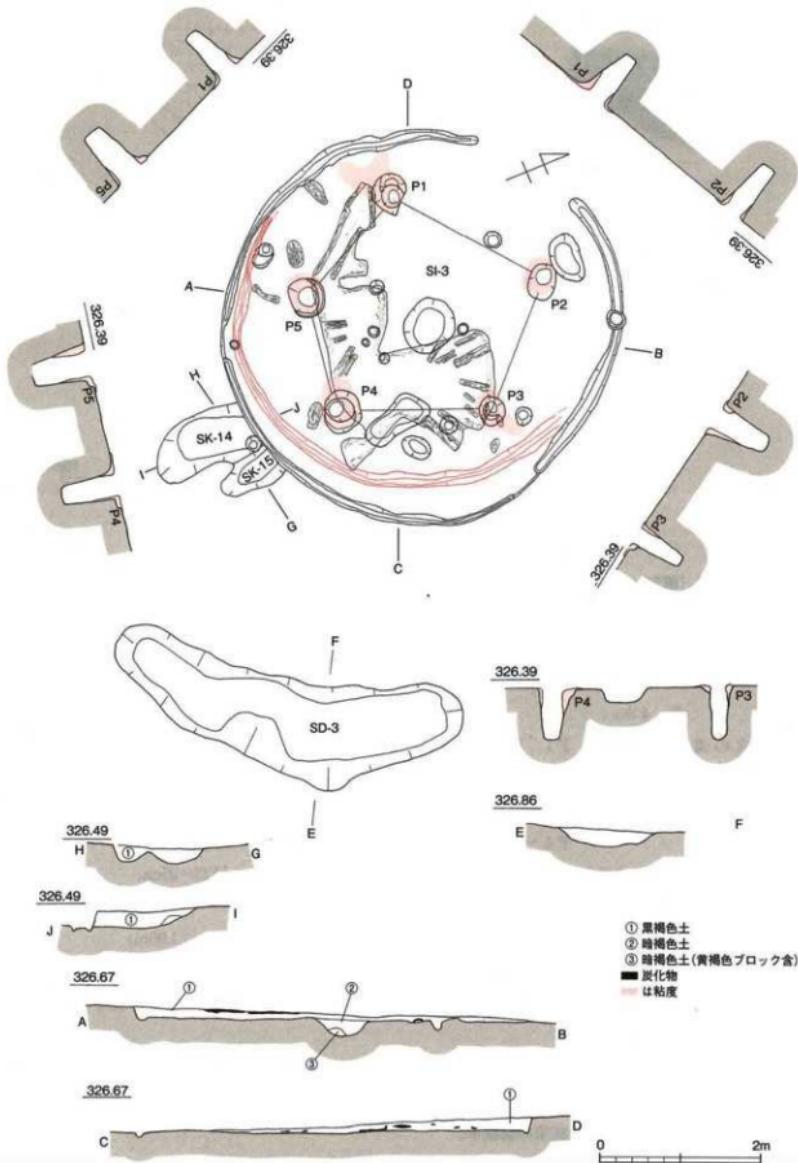
屋 内 施 設 床面中央部に60×70cm、深さ20cmの楕円形の土坑。

残 存 壁 高 東側で最大20cm、西側の壁は消滅している。壁に沿って5~10cm、深さ5~6cmの周溝が巡る。

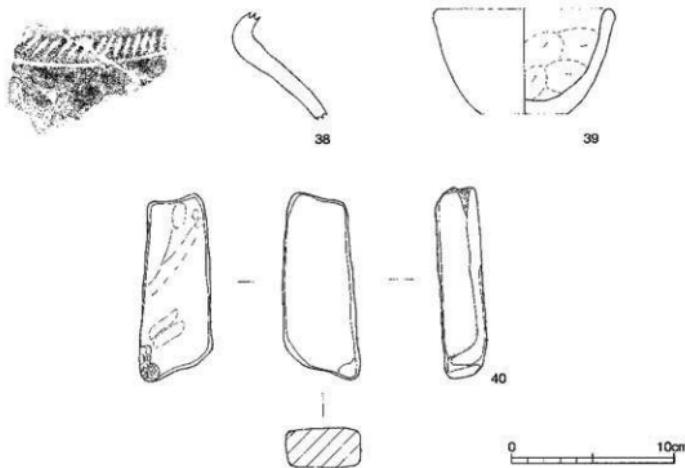
備 考 P2、P4付近の床面に35×62cm、深さ6cm、40×80cm、深さ15cmの土坑があるが性格は不明。SD-3は本住居跡の周溝と推定される。

出 上 遺 物 弥生土器片小量と砥石。

時 代 弥生時代後期前半。



第23図 SI-3・SD-4・SK-13・14実測図 (1:60)



第24図 SI-3出土遺物実測図 (1:3)

d. SI-4 (第25・26図、第2表、図版第14b~15a)

SI-3の北西14mに位置する。上層の観察から本住居跡は、当初の住居跡直径約4.2mの壁面を埋めて直径3.8mに縮小している。

平面形・規模 円形、当初の直径約4.2m、縮小後の直径約3.8m。

柱 穴 4本。

柱 穴 の 規 模 (縮小前) P1 : 径25~33cm、P2 : 径27~30cm、P3 : 径27~28cm、
P4 : 径27~30cm

柱 穴 間 距 離 (縮小前) P1~P2 : 1.70m、P2~P3 : 1.90m、P3~P4 : 1.95m
P4~P1 : 1.60m

柱 穴 の 規 模 (縮小後) P1 : 径32~35cm、P2 : 径23~25cm、P3 : 径23~25cm、
P4 : 径24~25cm

柱 穴 間 距 離 (縮小後) P1~P2 : 1.70m、P2~P3 : 1.90m、P3~P4 : 1.95m、
P4~P1 : 1.55m

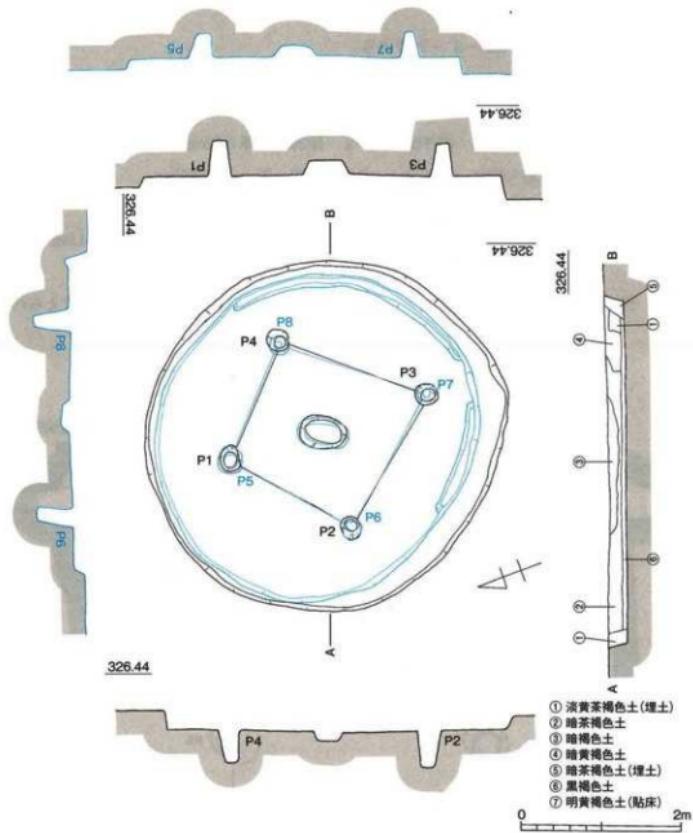
屋 内 施 設 当初床面中央に43×57cm、深さ13cmの楕円形土坑、縮小後40×70cm、深さ21cmの楕円形土坑。

残 存 壁 高 南側25cm、縮小後21cm。

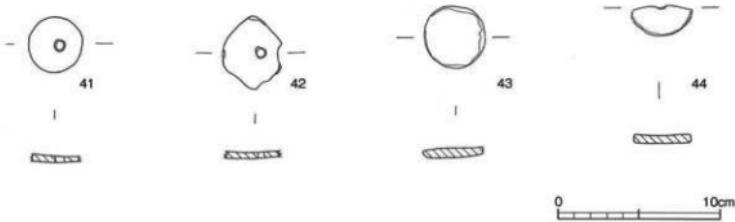
偏 考 縮小後に貼り床。

出 土 遺 物 弥生土器片転用の紡錘車。

時 代 弥生時代中期後半。



第25図 SI-4実測図 (1:60)



第26図 SI-4出土遺物実測図 (1:3)

e. SB-1 (第27図、図版第15b)

SI-3の東側に位置し、長軸N-3°-Wである。

規 模 2間×1間 (4m×2m) 床面積 8m²

柱 穴 6本。

柱穴の規模 P1: 径34~36cm 深さ62cm、P2: 径26cm 深さ62cm

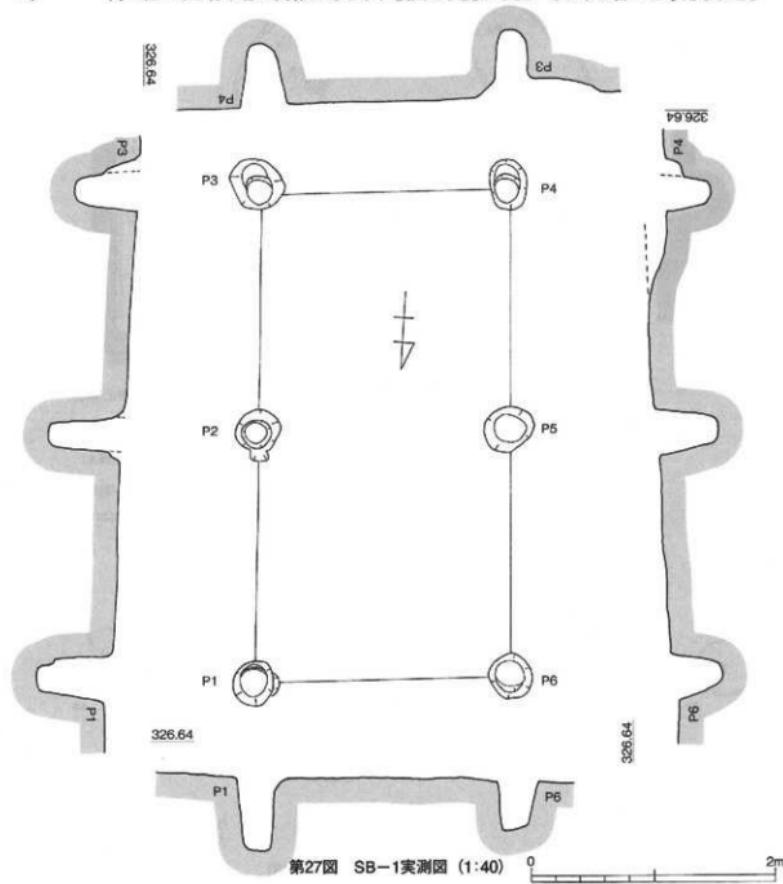
P3: 径33~40cm 深さ54cm、P4: 径29~30cm 深さ55cm

P5: 径34~40cm 深さ55cm、P6: 径35~36cm 深さ42cm

柱穴間距離 P1~P2: 2.0m、P2~P3: 2.0m、P3~P4: 2.0m、P4~P5: 1.9m

P5~P6: 2.0m、P6~P1: 2.1m

時 代 SD-3と切り合い関係にあるが、検出の状況からSD-3より古いと考えられる。



f. SB-2 (第28図、図版第15c)

SB-1の西約5mに位置し、SI-3と切り合ひ関係にある。長軸はN-52°-Eである。

規 模 5.5間×1間 (9m×29m) 床面積26.1m²。

柱 穴 14本。

柱穴の規模 P1:幅25cm 深さ34cm、P2:径24~25cm 深さ31cm

P3:径24~25cm 深さ16cm、P4:幅25cm 深さ26cm

P5:径25cm 深さ27cm、P6:径27~30cm 深さ25cm

P7:径25~27cm 深さ20cm、P8:径29~30cm 深さ29cm

P9:径26~30cm 深さ30cm、P10:径25~32cm 深さ30cm

P11:幅25cm 深さ35cm、P12:径30~35cm 深さ36cm

柱穴間距離 P1~P2:2.9m、P2~P3:1.7m、P3~P4:1.7m、P4~P5:1.7m

P5~P6:1.6m、P6~P7:1.8m、P7~P8:0.6m、P8~P9:2.9m

P9~P10:0.6m、P10~P11:1.8m、P11~P12:1.5m、P12~P13:1.8m

P13~P14:1.6m、P14~P1:1.7m

備 考 SB-2のP12とSI-3のP1と切り合っており、SI-3のP1下からP12が検出されており、SI-3よりSB-2の方が古い。また、北東妻先半間の所に柱穴があり、庇が設けられた可能性がある。

溝状遺構

溝状遺構を4箇所検出した。いずれも調査区のはば中央部で竪穴住居跡周辺に所在する。SD-2、SD-4はSI-2の周溝、SD-3はSI-3の周溝と推定される。

g. SD-1 (第29・30図、第2表、図版第16a~18c)

SI-3の北3mに位置する。

平面形・規模 いびつな隅丸長方形。長さ3.8m、幅0.8~1.2m、深さ20~36cm、北西端の底部が一段深く掘りこまれている。

出土 遺物 小型壺の完形品他土器片小量。

時 代 弥生時代中期後半。

h. SD-2 (第31図、図版第19a、b)

SI-2の北西3mに位置する。

平面形・規模 SI-2に沿って弧状に伸びるが、調査区外に延びていて全体の規模は不明である。検出した規模は上端で4.8m、下端で3.6m、幅0.75~4.7m、深さ7~10cm。

出土 遺物 弥生土器の細片が小量出土したが固化できず。

時 代 弥生時代後期前半。SI-2の周溝と推定される。

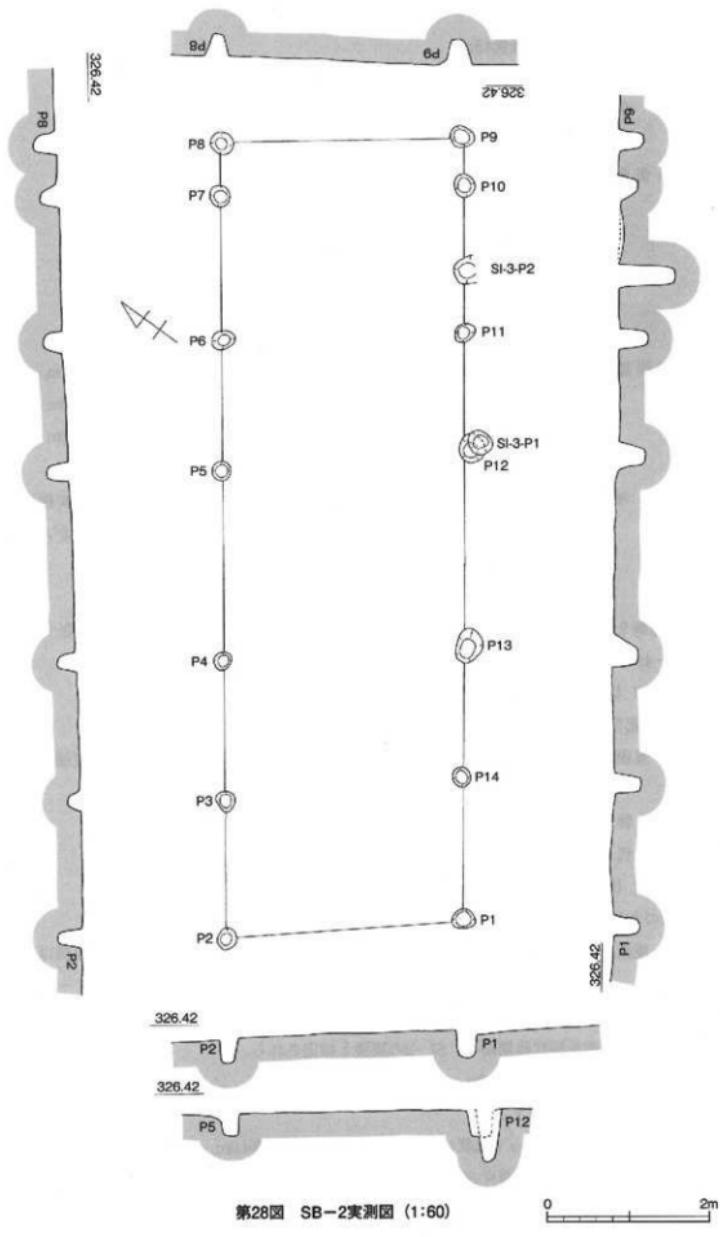
i. SD-3 (第23図、図版第19c、20a)

SI-3の南東2mに位置する。

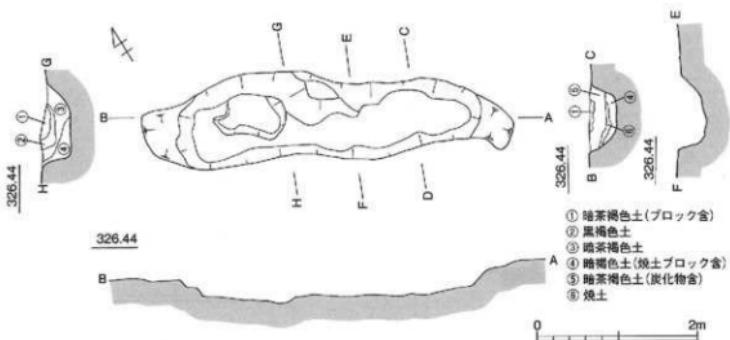
平面形・規模 SI-3に沿って弧状にのびる。上端4.4m、下端4.0m、深さ20~24cm。

出土 遺物 弥生土器の細片が小量出土したが固化できず。

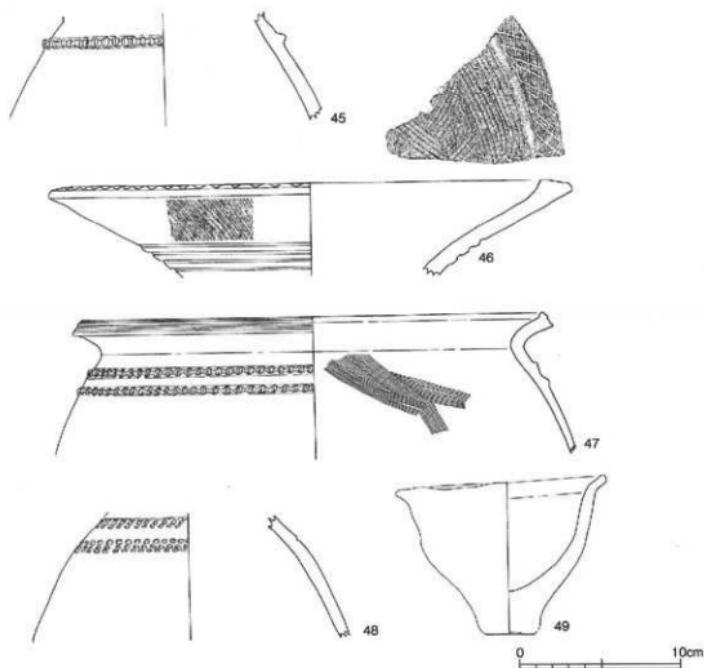
時 代 弥生時代後期前半。SI-3の周溝と推定される。



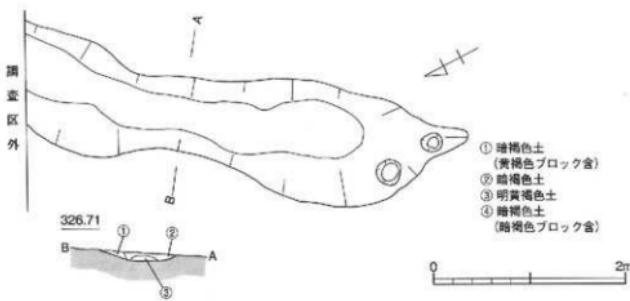
第28図 SB-2実測図 (1:60)



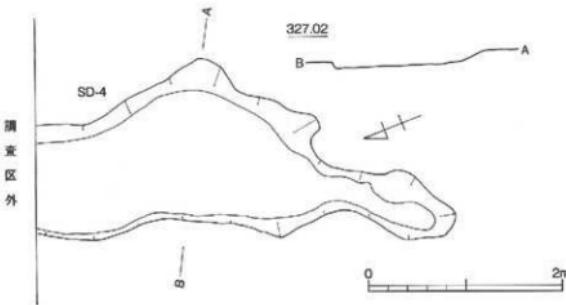
第29図 SD-1実測図 (1:60)



第30図 SD-1出土遺物実測図 (1:3)



第31図 SD-2実測図 (1:50)



第32図 SD-4実測図 (1:50)

j. SD-4 (第32図、図版第20b)

SI-2の北東2.5mに位置する。

平面形・規模 SI-2に沿って弧状に延びるが、調査区外に延びているため、全体の規模は不明。

検出した規模は上幅4.4m、底部4.2m、幅0.4~1.66m、深さ 8~20cm。

出土遺物 弥生土器の細片が出土したが図化できず。

時代 弥生時代後期前半。SI-2の周溝と推定される。

土坑

調査区東側および西側を中心に15基の土坑を検出した。

k. SK-1 (第33、34図、第2表、図版第20c~22a)

SI-3の北西3mに位置する。

平面形・規模 ややいびつな円形。上幅1.86×2.08m、底部1.65×1.74m、深さ10~15cm。

備 考 土坑内は被熱しており、炭も検出。土器片検出。

出 土 遺 物 弥生土器。

時 代 弥生時代後期前半。

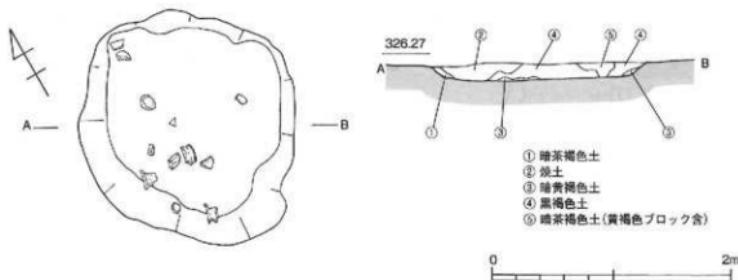
I. SK-2 (第35・36図、第2表、図版第22b~23b)

SI-3の南西3.4mに位置する。

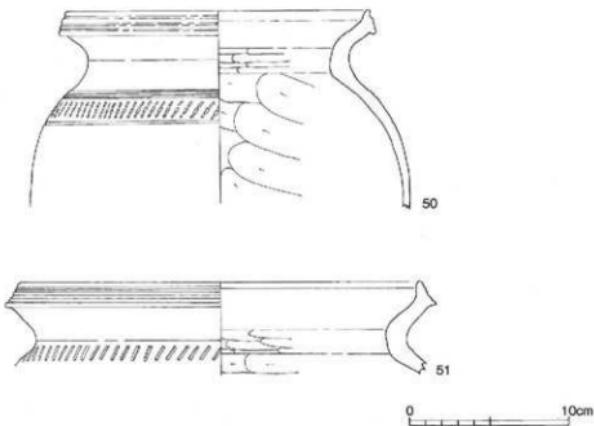
平面形・規模 鉄アレー状を呈し、上幅は0.96~3.20m、底幅0.44~2.54m、深さ14~16cm。

出 土 遺 物 弥生土器。

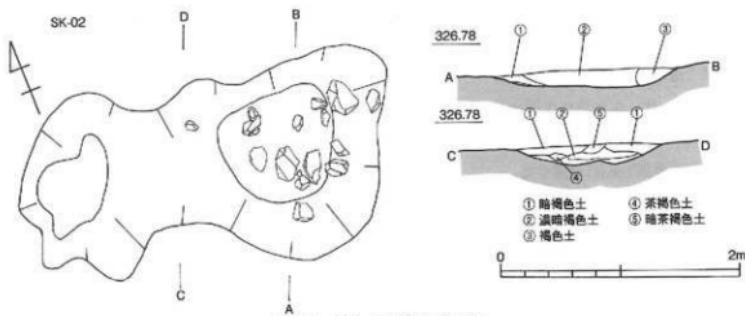
時 代 弥生時代後期前半。



第33図 SK-1実測図 (1:40)



第34図 SK-1出土遺物実測図 (1:3)



第35図 SK-2実測図 (1:40)

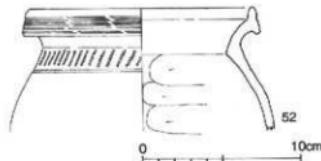
m. SK-3 (第37~39図、第2表、図版第23c~

25a)

SI-2の南側40cmに位置する。

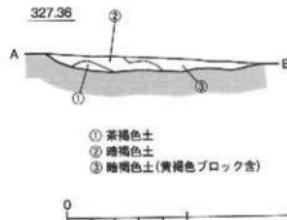
平面形・規模 やや崩れた梢円形。上幅1.24×1.82m、底幅0.82×1.12m、深さ14~27cm。

出土遺物 弥生土器片とヒスイの勾玉。石材は姫川産。

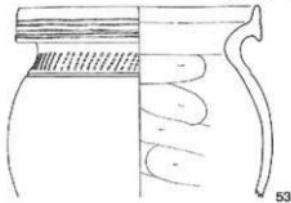


第36図 SK-2出土遺物実測図 (1:3)

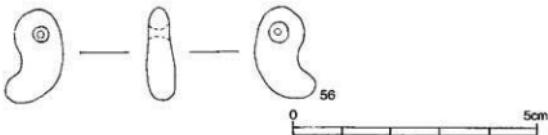
時 代 弥生時代後期前半。



第37図 SK-3実測図 (1:40)



第38図 SK-3出土遺物実測図 (1:3)



第39図 SK-3出土遺物(勾玉)実測図(1:1)

n. SK-4 (第40図、図版第25b・c)

SK-3の南東8.5mに位置する。

平面形・規模 楕円形。上幅0.81×1.27m、底幅0.30×0.88m、深さ33cm。

備 考 土坑は2段に掘削され、底部に木棺の痕跡を検出。

出土遺物 なし。

時 代 出土遺物がなく明確な時代は不明であるが、弥生時代の幼児の木棺墓と推定される。

o. SK-5・6 (第40図、図版第26a)

SK-4の東2mに位置する。SK-5・6は切り合い関係にあり、5が6を切っている。

平面形・規模 SK-5・6とも細長い楕円形であるが、SK-6は1/4を欠いているので全容は不明。SK-5は上幅0.98×2.42m、底幅0.66×1.80m、深さ15~36cm。

SK-8は上幅0.82×1.60m(残存部)、底幅0.55×0.55m、深さ34~43cm。

出土遺物 なし。

時 代 不明であるが、SK-6がSK-5より古い。弥生時代か。

p. SK-7 (第41図、図版第26b)

SK-13の南東3.4mに位置する。

平面形・規模 隅丸長方形。上幅0.81×1.32m、底幅0.58×1.07m、深さ21~28cm。

出土遺物 なし。

時 代 不明。

q. SK-8 (第41図、図版第26c)

SK-7の東側5mに位置する。

平面形・規模 やや崩れた楕円形。0.99×1.37m、底幅0.67×1.03m、深さ44cm。

出土遺物 なし。

時 代 不明。

r. SK-9 (第41図、図版第27a)

SI-4の南西14.2mに位置する。

平面形・規模 円形。上幅1.29×1.45m、下幅0.86×1.01m、深さ64cm。

出土遺物 なし。

時 代 不明。

s. SK-10 (第41図、図版第27b)

SK-9の南側70cmに位置する。

平面形・規模 円形。上幅0.92~1.00m、底幅0.80~0.85m、深さ27cm。

出土遺物 なし。

時 代 不明。

t. SK-11 (第41図、図版第27c)

SK-10の西南18.5mに位置する。

平面形・規模 楕円形。上幅 0.66×0.79 m、底幅 0.56×0.65 m、深さ23cm。

出土 遺物 なし。

時代 不明。

u. SK-12 (第41図、図版第28a)

SI-4の南5mに位置する。

平面形・規模 崩れた円形。上幅 0.86×0.94 m、底部 $0.85 \sim 0.90$ m、肩部 $1.00 \sim 1.08$ m、深さ30cm。

備考 断面袋状。

出土 遺物 なし。

時代 不明。

v. SK-13 (第41図、図版第28b)

SK-5の東4.3mに位置する。

平面形・規模 円形。上幅 0.96×1.04 m、底幅 0.66×0.80 m、深さ30cm。

出土 遺物 なし。

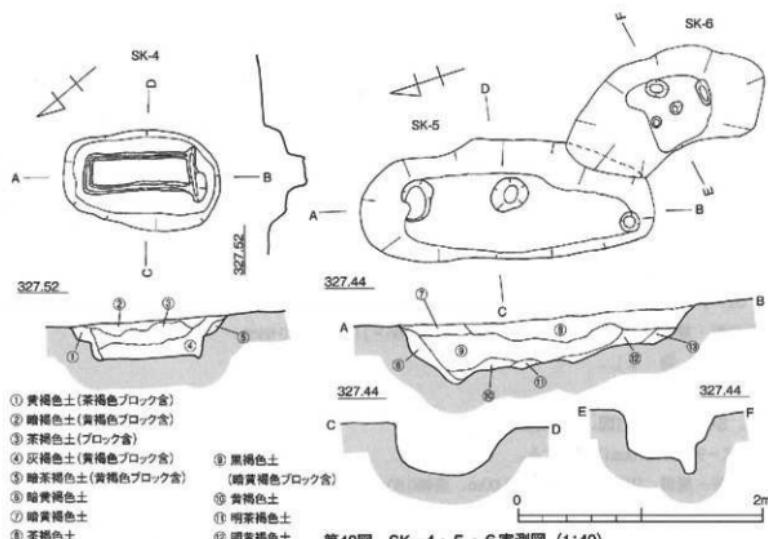
w. SK-14・15 (第23図、図版第28c)

SI-3の南側壁面に接して位置しSI-3によって切られている。

平面形・規模 SI-3に切られているため平面形や規模は不明であるが、残存規模はSK-14が上幅

$0.74 \sim 1.26$ m、底幅 $0.46 \sim 0.94$ m、深さ18cm。SK-15が上幅 $0.48 \sim 0.78$ m、下幅 $0.24 \sim$

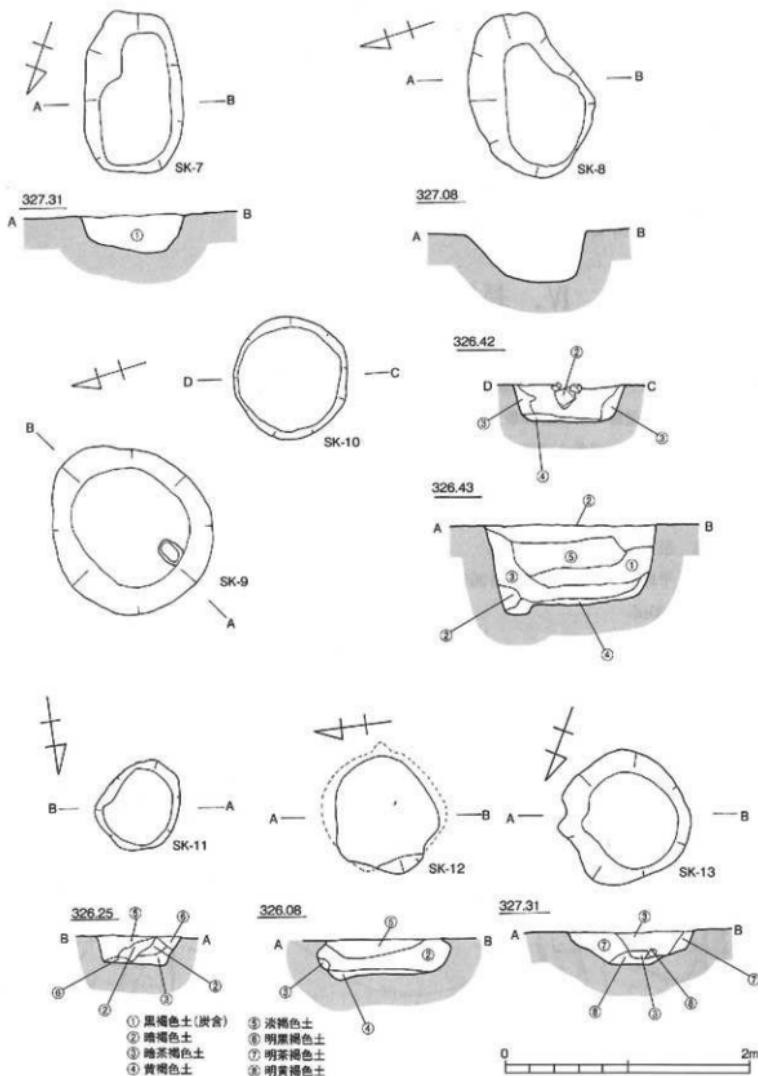
0.56 m、深さ18cm。



第40図 SK-4・5・6実測図 (1:40)

出土遺物なし。

時代 SI-3との切り合い関係から弥生時代後以前と考えられる。



第41図 SK-7・8・9・10・11・12・13実測図 (1:40)

(7) 小結

調査により竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構4箇所、土坑15基検出した。

また、遺構は検出されていないが、縄文早期の押型文土器とともに石鎚や剥片を検出した。

縄文土器は粗大な楕円文や、口縁内部に斜行沈線が施されている。高山寺式並行期のものと考えられる。石器は黒曜石や安山岩で作られた石鎚が主で一部未製品もあるが、押型文土器と同レベルで出土しており高山寺式並行期と考えられる。住居跡はSI-1が弥生時代中期末、SI-2・3・4が弥生時代後期前半と考えられる。

掘立柱建物跡SB-1はSI-3の周溝と切り合い関係にあり、SI-3に先行する。SB-2は石見部大級の掘立柱建物で、SI-3と切り合っており、時期はSI-3に先行するが、SB-1とは軸線がことなることから時期差があると思われる。

IV. 長尾原遺跡の調査概要

(1) 調査に至る経緯

長尾原遺跡は、順庵原A・B遺跡と同じく出羽川右岸の河岸段丘上に位置し、縄文時代から歴史時代に至る複合遺跡で、邑智郡最大級の遺跡である。遺跡に沿って東西に貫く町道淀原馬場線は小中学校の通学路として多くの児童生徒が利用しているが、幅員が狭小で交通安全確保のため拡幅工事が必要となり工事に先立ち発掘調査を実施した。調査により竪穴住居跡1棟、溝状遺構、土坑、古墳などを検出した。

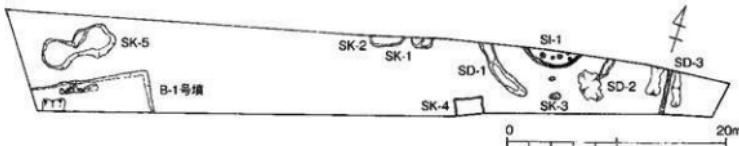
調査地 邑智郡邑南町下龜谷地内

調査期間 平成7年7月4日～9月26日

調査面積 430m²



第42図 長尾原遺跡地形測量図 (1:1000)



第43図 長尾原遺跡遺構配置図

(2) 弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡 1 棟と溝状遺構、土坑を検出した。

竪穴住居

a. SI-1 (第44・45図、第3表、図版第31a～32a)

調査区東側で検出したが、遺構の3/4は調査区外で全容は不明である。

平面形・規模 検出遺構は半月状であるが、復元遺構は円形で直径6.4m。

柱 穴 検出柱穴は 2 本であるが、本来は 6 本の柱穴と推定される。

柱 穴 の 規 模 P1 : 径35cm、深さ58cm、P2 : 25~35cm、深さ70cm

柱 穴 間 隔 離 P1 ~ P2 : 2.30m。

残 存 壁 高 19cm。

出 土 遺 物 弥生土器の細片が小量出土した。

時 代 弥生時代後期。

備 考 SD-1、SD-2はSI-1の周溝。

溝状遺構

b. SD-1 (第44・46図、第3表、図版第31a・32b～33b)

平面形・規模 SI-1の西側に位置し、SI-1に沿って弧状に延びる。SI-1との距離は約2.3mである。調査区外へ延びるため全長は不明。検出規模は長さ5.9m、幅0.8~1.2m、深さ11~33cm。

出 土 遺 物 弥生土器。

時 代 弥生時代後期。

c. SD-2 (第44図、図版第31a・33c)

平面形・規模 SI-1の東側約 2 m に位置し弧状に延びる。SI-1との距離は約2.1m。後世の搅乱による消滅と調査区外へ延びるため全長は不明。検出規模は長さ20m、幅37~73cm、深さ5~10cm。

出 土 遺 物 なし。

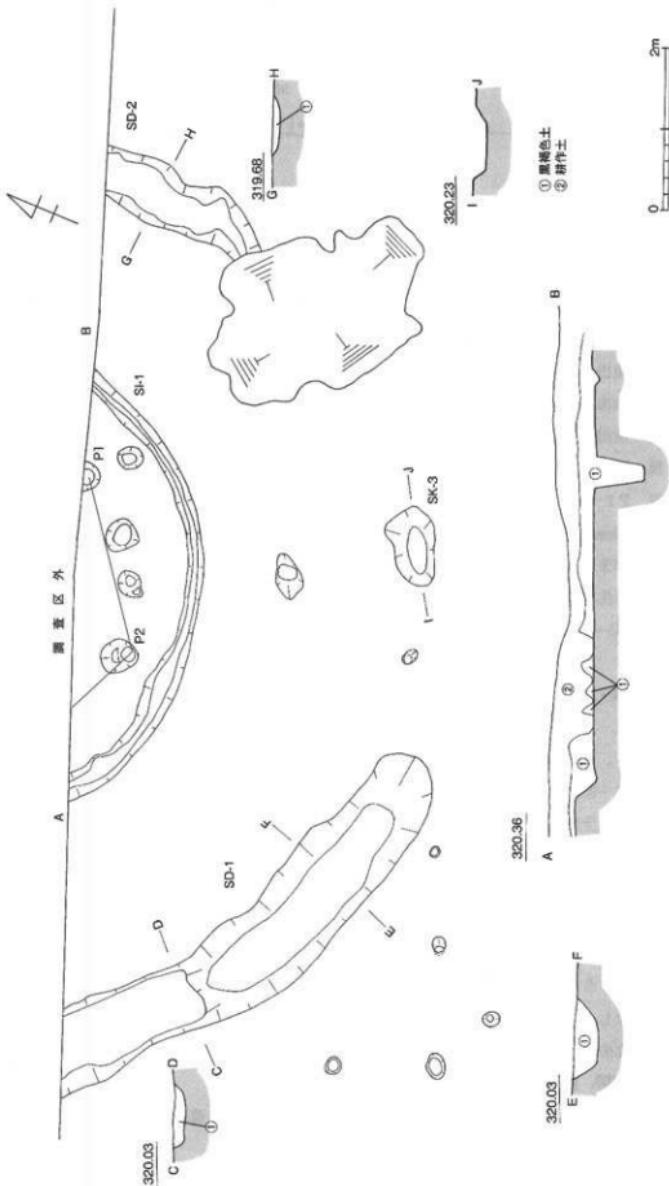
時 代 弥生時代後期後半。

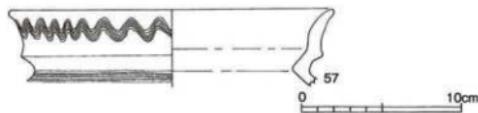
d. SD-3 (第47図、図版第34b・45b)

SD-2の東約 5 m に位置するが、北側は調査区外、南側は昭和43年の道路改良工事で消滅しており全長は不明。

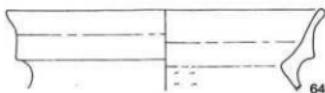
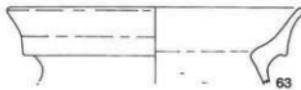
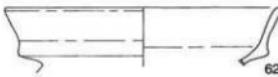
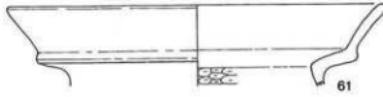
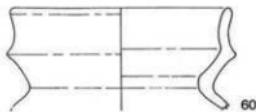
平面形・規模 南北に直線状に伸びる。検出規模は長さ4.05m、幅35~45cm、深さ21~26cm。

第44図 SI-1・SD-1・2・SK-3実測図 (1:50)

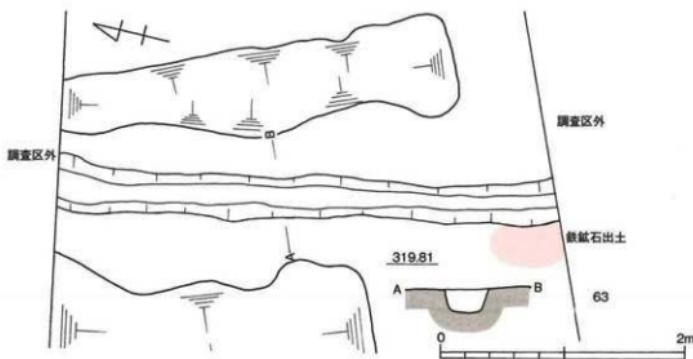




第45図 SI-1出土遺物実測図 (1:3)



第46図 SD-1出土遺物実測図 (1:3)



第47図 SD-3実測図 (1:40)

出土遺物 遺構内から遺物は出土していないが、遺構南端西側で鉄鉱石出土。

時代 昭和43年の調査でも本遺構の南側延長線上に溝状遺構が検出されており、当時の調査成果等から奈良時代と考えられる。

土坑

e. SK-1 (第48図、図版第34c・35a・36a)

平面形・規模 SI-1の西側8.2mに位置する。調査区外に延びており平面形や規模は不明。復元平面形は梢円か。検出規模は最大幅1.95m、深さ20cm。

出土遺物 なし。

時代 弥生時代後期か?

f. SK-2 (第48図、図版第35b・c・36a)

平面形・規模 SK-1の西側50cmに位置する。遺構は調査区外にのびており平面形や規模は不明。検出規模は最大幅3.2m、深さ12cm。

出土遺物 細片で固化できないが、土器の特徴から弥生時代後期。

時代 弥生時代後期。

g. SK-3 (第44図、図版第34a)

平面形・規模 SI-1の南東5mに位置する。平面形はくずれた梢円で、規模は0.55×1.0m、深さ17cm。

出土遺物 なし。

時代 不明。

h. SK-4 (第49・50図、第3表、図版第36b～37a)

平面形・規模 SD-1の南側2m位置する。遺構南東側は昭和43年の道路改良工事により消滅。

検出平面形は方形で1.4×2.5m、深さ5cm。

出土遺物 石斧、弥生土器細片が小量出土。

時代 弥生時代。

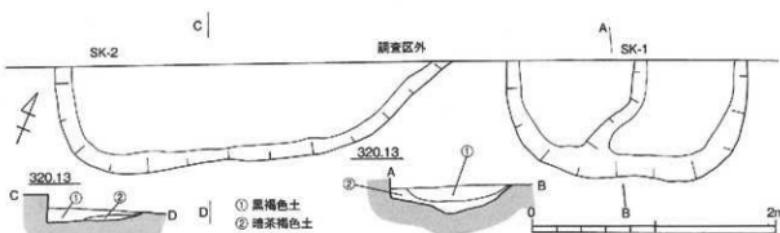
備考 堪穴住居跡の可能性あり。

i. SK-5 (第51図、図版第37b～38a)

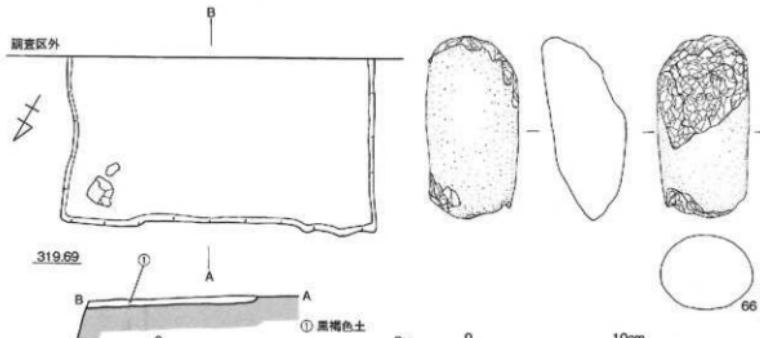
平面形・規模 B-3号墳の北西1.7mに位置する。平面形はヒョウタン形で長軸10.2m、短軸1.45m、深さ17～87cmで西側が浅い。

出土遺物 なし。

時代 不明（弥生時代か）。



第48図 SK-1・2実測図 (1:40)



第49図 SK-4実測図 (1:40)

第50図 SK-4出土遺物実測図 (1:3)



第51図 SK-5実測図 (1:60)

(3) 長尾原A3号墳の遺構と遺物 (第52~57図、図版第38b~45a)

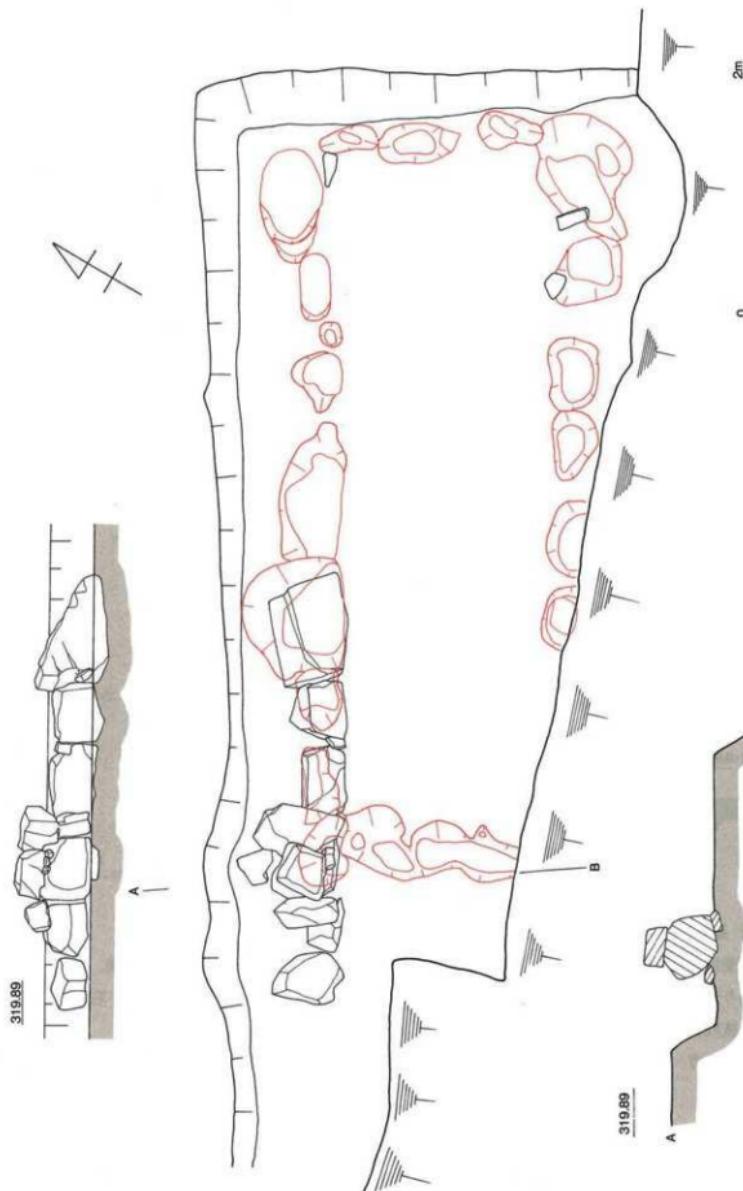
調査区西端で横穴石室1基を検出した。開墾による耕地化で墳丘は消滅、石室も破壊、搅乱されており遺存状態は良くないが、石室の掘り方や根石の一部と石材の抜取痕を検出した。石室は閉塞石の抜取痕から西側に開口していたと推測され、石室軸線はE-15°-Nである。

石室掘り方 検出した掘り方は石室北側と東側で現況で地山を14~58cm掘削しているが南側は消滅して不明である。復元掘り方は北側根石と掘り方の関係から、東西9.1m以上、南北4m以上と推測される。

石室の規模 石室の根石や抜取痕から長さ5.6m、幅1.8mと推測されるが高さは不明。

石材の規模 検出石材は10個で最大は60×80cm、最小は20×50cm、石質は花崗岩。

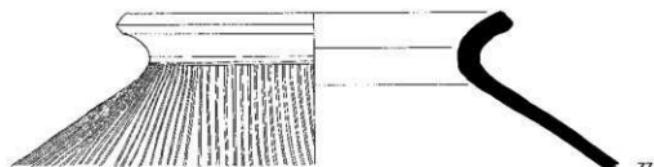
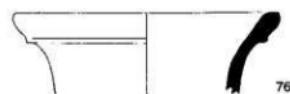
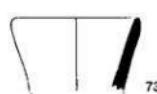
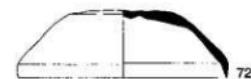
第52図 長尾原A3号墳測図 (1:40)



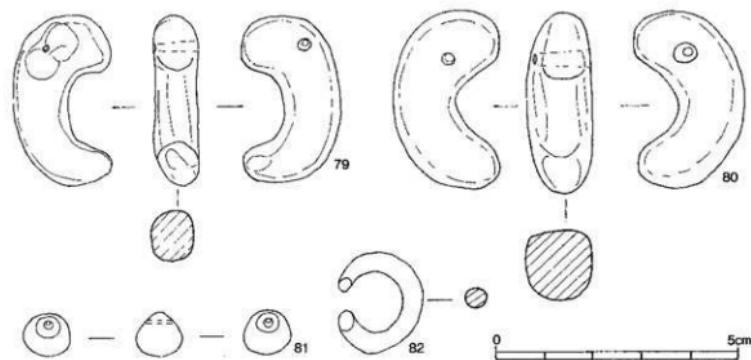
出土遺物 勾玉類、須恵器坏、鉄器等。

時代 古墳時代後期

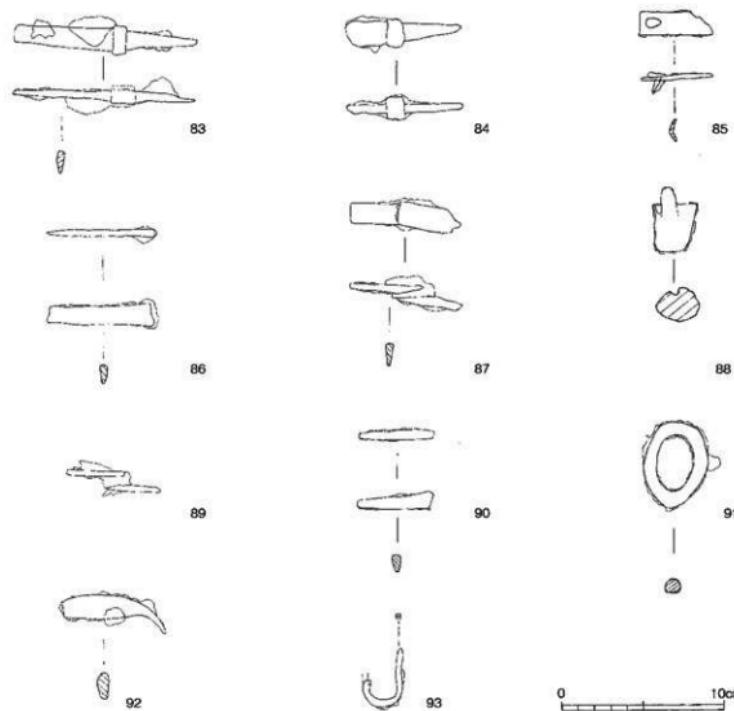
備考 西端の根石は金床石を転用したものと考えられる。



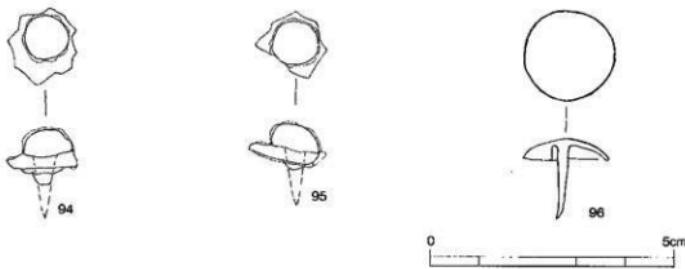
第53図 長尾原A3号墳出土遺物実測図① (1:3)



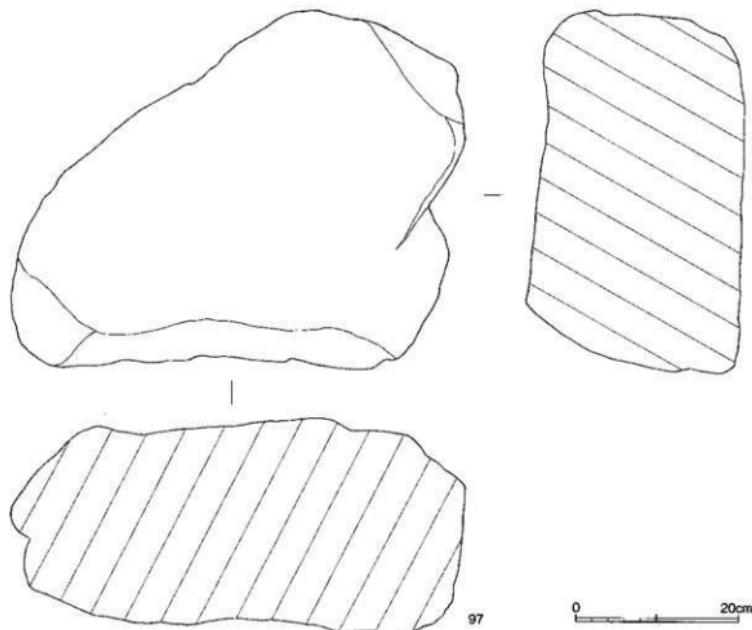
第54図 長尾原A3号墳出土遺物実測図② (1:1)



第55図 同③ (1:3)



第56図 長尾原A3号墳出土遺物実測図④ (1:1)



第57図 長尾原A3号墳出土金床石 (1:6)

(4) 小結

本遺跡は昭和43（1968）年に道路新設工事に先立って発掘調査（1次調査）が実施され、古墳時代の堅穴住居跡3棟の他、古墳時代の製鉄関連炉も検出されている¹³。今回の調査（2次調査）は道路拡幅工事に先行して、昭和43年の調査区の北側に長さ60m、幅2～8mの調査区を設定して実施した。調査により弥生時代後期後半の堅溝をもつ堅穴住居1棟と土坑、溝状造構、古墳を検出し

た。調査区内からは鉄鉱石や鉄滓が出土しているほか、古墳玄門付近の根石は金床石を転用しており、1次調査で検出された製鉄関連炉との関係や、当地方の古代の製鉄を考える上で貴重な資料となるであろう⁽²⁾。

註

- (1). 門脇俊彦「農免道路新設に伴う長尾原遺跡及び長尾原一号墳調査概報」鳥取県川本農林土木事務所 1969年2月
- (2). 森岡弘典「鳥取県境港町長尾原遺跡の特殊道槽製鉄関連炉と長尾原3号墳の金床石について」「考古論集－河瀬正利先生退官記念論集－」河瀬正利先生退官記念事業会編 2004年



長尾原遺跡空中写真（南東から）

付編 1

長尾原遺跡出土鉄滓，炉壁 および鉱石の調査

日立金属株式会社冶金研究所

和 鋼 博 物 館

長尾原遺跡は島根県邑智郡瑞穂町大字下龜谷に所在し、出羽川によって形成された河岸段丘を中心とした出羽盆地に古くから集落が形成されその中でも随一の集落跡といわれる。出土土器から弥生式時代後期ごろから平安時代にかけての長期間集落跡と考えられており、これが農面道路新設予定地内に位置するため、瑞穂教育委員会によって発掘調査が行われた。出土した鉄滓及び炉壁について分析依頼があったので金属学的調査を行った。その結果と、若干の考察を加えたので併せて報告する。

1. 資 料

資料の明細および外観をそれぞれ表1, 写真1～4に示す。

2. 化学組成

各資料から分析試料を採取し化学分析を行った。各資料の化学組成を表2に示す。このうち炭素及び硫黄は堀場製作所 E M I A - 1 2 0 0 型 C. S 同時定量装置による赤外線吸収法により、その他の元素は島津製作所製高周波誘導結合プラズマ発光分光分析装置 (I C P V - 1 0 1 2 型) により定量した。

3. 顕微鏡組織

各資料の顕微鏡組織を写真5～8に示す。

資料No.1はファイヤライトが主体である。資料No.2はファイヤライトとハーシーナイトが主体である。試料No.3炉壁溶融部は硫化物の結晶が認められる。

4. 構成相の解析

前項で観察した試料を用い、走査型電子顕微鏡 (S E M) による微細組織の観察ならびにE D X分析(エネルギー分散型X線分析)による局部的な定性分析を、また粉碎試料を用いX線回折を行ない、構成結晶の同定を行なった。結果を写真9～13に示す。

またこれらの結果を総括し、各資料の構成相を示すと表3のようになる。

表 1 資 料 の 明 細

番号	名 称	明 細	重量(g)
No. 1	長尾原遺跡 スラグ溜り鉄滓	表面黒色で光沢あり、やや凹凸状で、低温で流れた感じで、重たい	275
No. 2	長尾原遺跡 第2炉跡鉄滓	表面黒色で光沢あり、やや緻密であるが凹凸状、重たい感じのもの	40
No. 3	長尾原遺跡 炉壁	炉内側は溶融状を呈する。外側部は粘土色のもの、また少し湾曲状である	125
No. 4	鉱 石	表面やや黒色で鉄滓と思われる形状である。	



写真 1 資料 No. 1 鉄滓の外観



写真 2 資料 No. 2 鉄滓の外観



No.3 瑞穂町長尾原遺跡出土瓦

写真3 資料No.3 炉壁の外観

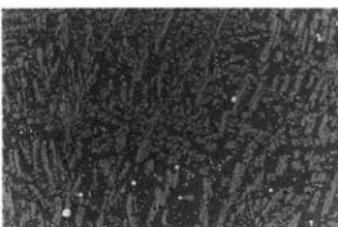


NO.4 瑞穂町長尾原遺跡鉱石

写真4 資料No.4 鉱石の外観

表2 各資料の化学組成(重量%)

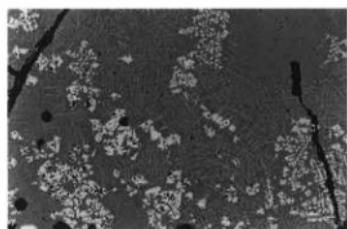
番名	称	C	SiO ₂	MnO	P	S	Ni	Cr ₂ O ₃	Na	K	CaO	MgO	V ₂ O ₅	TiO ₂	Cu	Al ₂ O ₃	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	M.Fe	Ag
61	スラグ溜鉄滓	0.23	46.10	0.78	0.051	1.31	0.06	0.03	0.07	1.35	0.83	0.16	0.020	0.24	0.14	7.31	27.87	29.95	6.09	0.33	<0.001
62	炉跡鉄滓	0.032	30.37	0.63	0.032	0.015	0.06	0.03	0.91	0.88	0.17	0.01	0.011	0.28	0.05	8.30	42.10	25.82	30.95	0.38	<0.001
63	炉跡鉄滓(A)	0.50	71.84	0.15	0.040	0.006	0.01	0.01	0.56	1.78	0.05	0.06	0.021	0.53	0.01	15.23	2.67	0.36	3.40	0.01	
63	炉跡鉄滓(B)	0.013	62.33	0.31	0.042	0.115	0.05	0.03	0.45	1.59	0.12	0.05	0.010	0.47	0.09	11.58	14.91	13.66	5.93	0.14	
64	堇石	0.037	49.45	0.33	0.013	6.44	0.02	0.01	0.12	2.72	0.03	0.16	0.010	0.07	0.08	14.90	14.71	1.52	19.10	0.17	



× 100

写真5 No. 1 スラグ溜り鉄滓
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

× 400



× 100

写真6 No. 2 炉跡鉄滓
白色結晶はハーシーナイト(FeAl₂O₄)

× 400

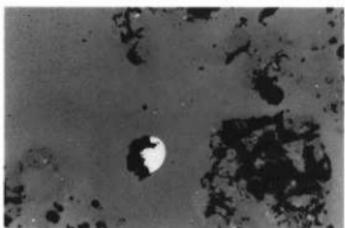


写真7 No.3 炉壁
白色の球形結晶は硫化物系

$\times 100$

$\times 400$

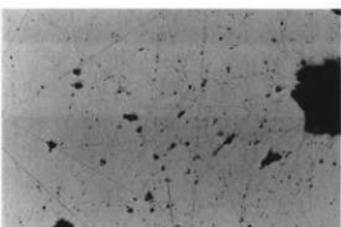
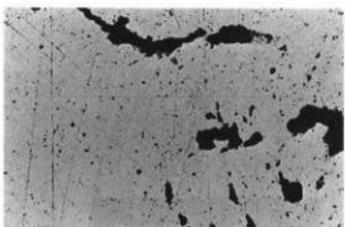
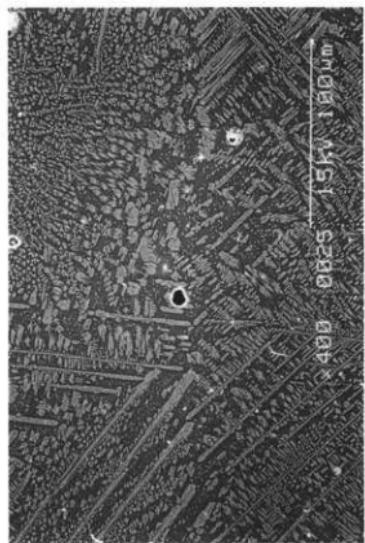
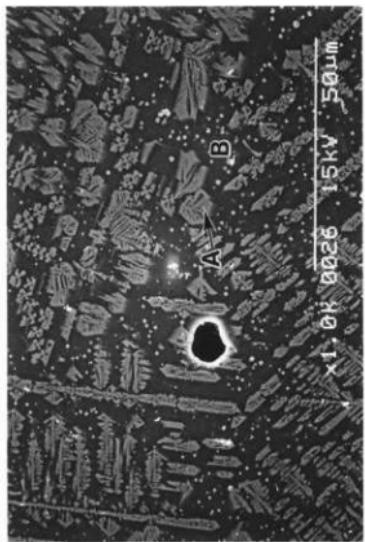


写真8 No.4 砥石

$\times 100$

$\times 400$



B部 ファイヤライト系

写真9 試料No.1のSEM像とEDX分析

A部 ファイヤライト

ヒークサーチ

サンプル名	長尾原 No1	[平滑化] 方法 : 加重平均	平滑化点数	: 7
ファイル	和倉博物館.0924	[n'アラウンド]	削除		
コメント	邑智郡端村町				
測定日	15-Aug-96 21:28	[Kα 2 削除]		
測定者	: deax	[ヒークサーチ]		
長尾原遺跡 NO 1					

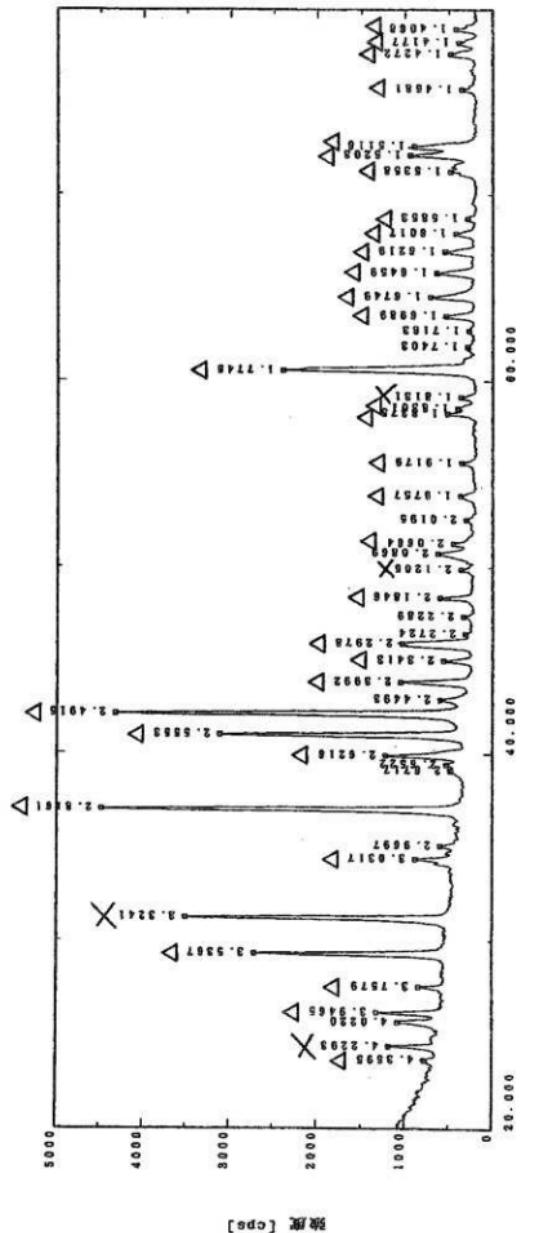
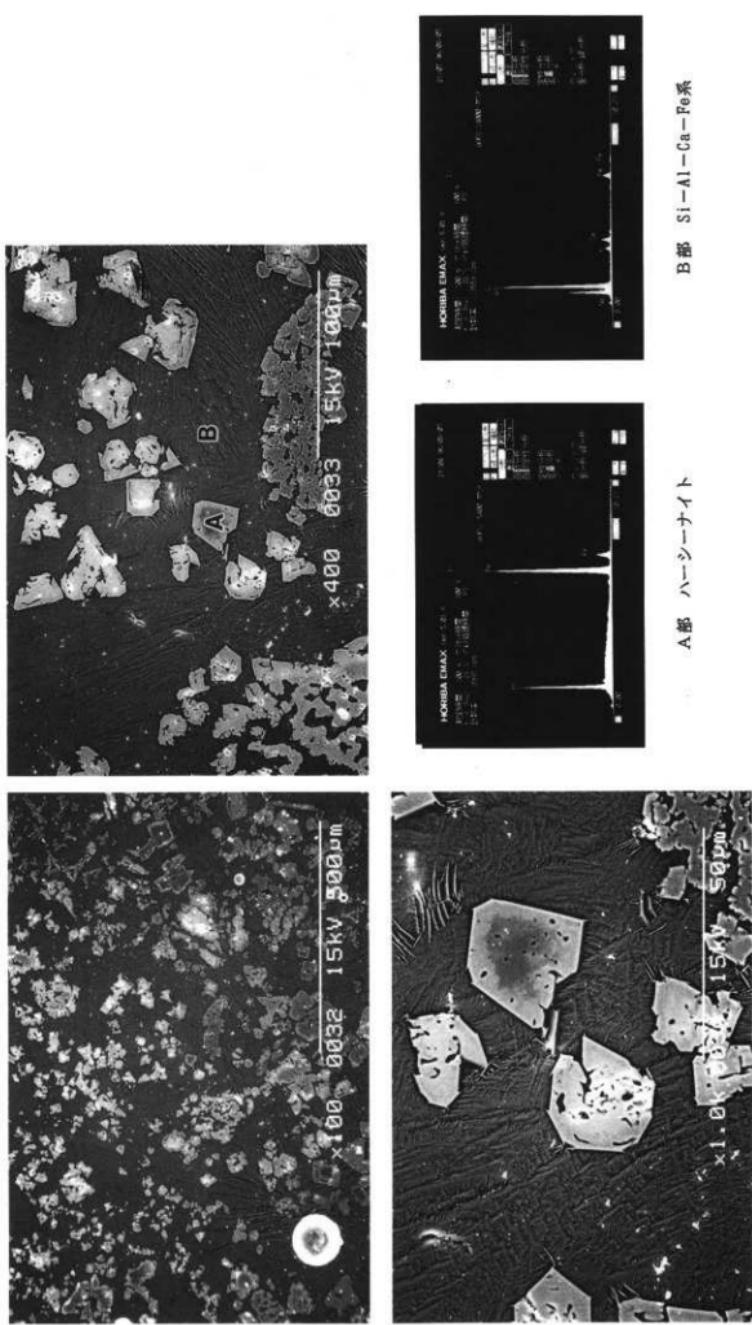


写真11 試料M2のSEM像とEDX分析



ヒークサーチ

サンプル名 : 長尾原 No2 [平滑化
方法 : 加重平均
ノット : 和鋼博物館.0933
ノット : 岐智郡瑞穂町
測定日 : 28-Aug-96 20:24 [K α 2 除去]
測定者 : daax

長尾原遺跡 NO 2

ピーケー強度しきい値 : 1.00
ピーケー強度しきい値 : 50.000

▼: FeAl₂O₄ 34-0192
△: Fe₂SiO₄ 34-0178

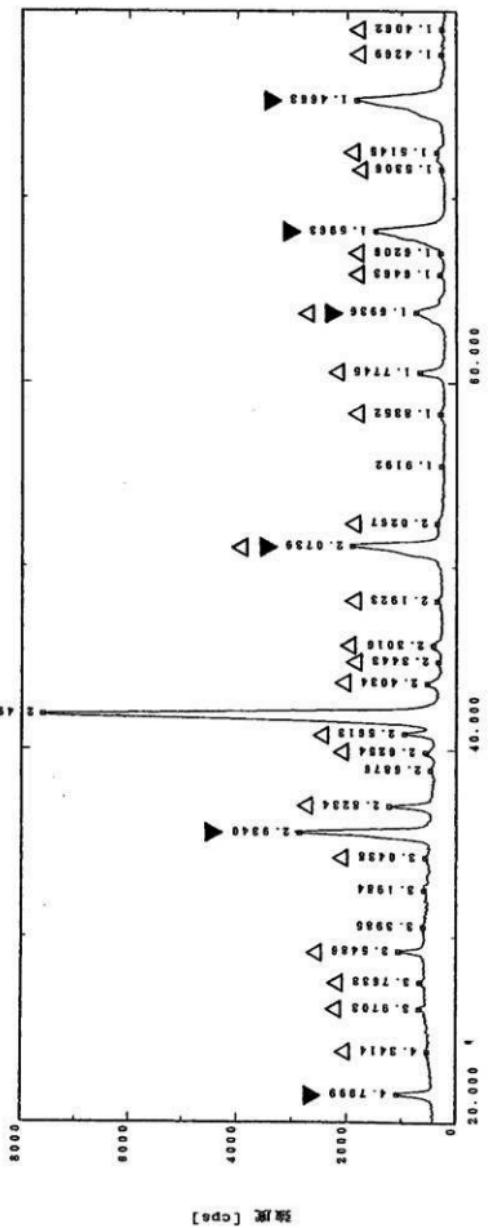
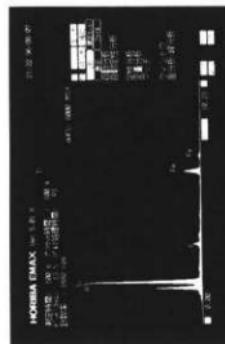
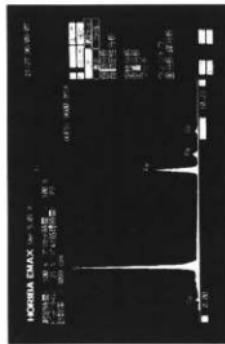
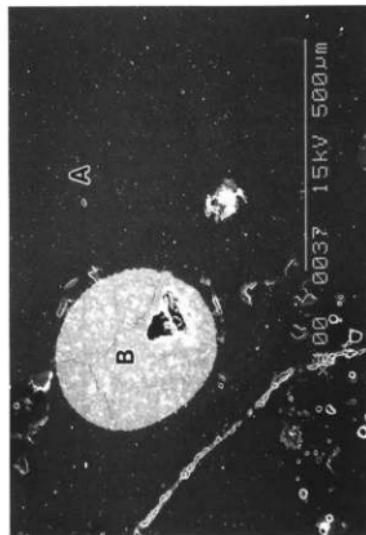


写真1.2 試料No.2のX線回折像



B部 硫化物系

写真13 試料No.3の黒色溶融部のSEM像とEDX分析

A部 Si-Al-Fe系

表3 各資料のX線回折による相解析

番号	資 料	ファイアライト Fe_2SiO_4	ハーシーナイト $FeAl_2O_4$	シリカ SiO_2	硫化物系 S-Fe系	基 地 (ガラス質)
No.1	スラグ溜り鉄滓	◎		○		Si-Fe-Al-K-Ca
No.2	第2炉跡鉄滓	◎	◎			Si-Al-Ca-Fe-K
No.3	炉壁黒色溶融部				○	Si-Al-Fe-K

注 : (1) ◎ : 多い ○ : あり

(2) 資料No.3はEDX分析による。

5. 考 察

(1) 大沢正己氏が調査された古墳出土鉄滓の化学組成および構成相のまとめを参考に本資料をまとめると表4のようになる。表4によって本資料が製錬滓か鍛冶滓かあるいは使用原料が砂鉄か鉱石(岩鉄)かについて考察してみる。

(1) 資料No.1について

鉄分27.87%は製錬滓の分類に含まれる。造滓成分54.40は砂鉄系製錬滓にしては高い。また TiO_2 量0.24% V量0.0112は砂鉄系製錬滓にしては低い。また写真5の顕微鏡写真および写真9のSEM像には殆どファイアライト組織で、鍛冶滓の特徴であるヴスタイト組織が見当らないことから本資料は硫黄分のやや高い鉱石(岩鉄)を原料にした製錬滓と判断される。

(2) 資料No.2について

鉄分42.10%は製錬滓の分類範囲であり、造滓成分38.85は鍛冶滓にしては高い。また TiO_2 量0.28%、V量0.0062%は砂鉄系製錬滓にしては低い。

顕微鏡組織写真6および写真11のSEM像にはファイアライト+ハーシーナイトが主体であり、鍛冶滓の特徴であるヴスタイト組織が見当らないことから鍛冶滓ではないこと、そして TiO_2 量、V量低いことから砂鉄系ではなく鉱石(岩鉄)を原料に用いた製錬滓と判断される。また硫黄および銅含有量がNo.1鉄滓よりやや低いことから、No.1とは鉱石の違ひなのか、製錬条件によるものか、例えばSは燃焼によって炉外に排出される可能性をもっているのでどちらともいえない。本資料No.1、No.2鉄滓と鉱石系製錬滓の化学組成比較を表5に示す。本資料No.1、No.2鉄滓は鉄分、造滓成分その他の組成も鉱石製錬滓と同程度を示している。

(3) 資料No.3炉壁について

本炉壁資料を(A)、(B)に分けて試料採取した。(A)は炉壁外側の粘土部分、(B)は炉内高温側で黒色ガラス化している部分である。本炉壁と從来調査した各種釜土との化学組成比較を表5に示す。粘土部(A)に対する黒色部(B)の鉄分富化率をみると $\frac{T_{Fe}(B)}{T_{Fe}(A)} = 5.58$ である。從来調査した製錬炉壁の鉄分富化率は2.37~3.06であったが本炉壁はそれよりも高いことから、炉内でかなり激しい反応が行われたものと推定される。また本炉壁の SiO_2 量71.84% Al_2O_3 量15.23%は表6の製錬釜土の SiO_2 量64.44%~77.16%， Al_2O_3 量13.60%~18.90%の範囲内であることから製錬炉に用いられた炉材と推定される。表2の化学組成では(A)粘土部のS量0.006%およびCu量0.01%であり、これに対し黒色部(B)はS量0.115%，Cu量0.09%と、いずれも高くなっていることから使用された鉱石のS量、Cu量はやや高かったものと思われる。従って資料No.1のS量が1.31%と高いことから本炉壁はNo.1鉄滓の製錬操業に用いられたものと推定される。

(4) 資料No.4 鉱石について

本資料鉄滓の原料が鉱石と分かった時点で、鉱石がないか調べてもらい送付を受けたのが、本資料No.4である。中心より切断したところ全くの石であった。鉄分14.71%と低いことから選別除外されたものであろうか、S量6.44%とやや高いが遺跡内からの出土により鉱石(岩鉄)使用の可能性は大きい。

表4 資料の化学組成と鉱物組成

組成	資料	No.1	No.2
全鉄分(T.Fe)		27.87	42.10
遺滓成分		54.40	38.85
二酸化チタン(TiO ₂)		0.24	0.28
バナジウム(V)		0.0112	0.0062
主な鉱物組成		F, SiO ₂ , F+FeAl ₂ O ₄	

注: 遺滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)

表5 本資料と鉱石系製錬滓の化学組成比較(重量%)

資料名	T.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	MnO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	S	P	V	Cu	C	遺滓成分
本資料No.1スラグ留鉄滓	27.87	29.95	6.09	46.10	7.31	0.83	0.16	0.78	0.24	0.03	1.31	0.051	0.01	0.14	0.23	54.40
本資料No.2炉跡鉄滓	42.10	25.82	30.95	30.37	8.30	0.17	0.01	0.63	0.28	0.03	0.015	0.032	0.006	0.05	0.032	38.85
北牧野鉱石製錬滓※	35.04	48.57	6.55	24.06	6.97	3.76	2.74	0.39	0.61	Tr	0.019	0.91	0.01	0.01	0.19	37.53
北牧野鉱石製錬滓※	42.42	43.30	9.50	25.40	5.13	2.20	1.28	2.80	0.22	0.022	0.029	0.39	0.036	0.006	—	34.01

注※ 平成3年度たら研究会大会見学会資料 P32 Table 2 鉄滓の化学組成

表6 各種釜土の化学組成比較(重量%)

種類	SiO ₂	Al ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	T.Fe	Al ₂ O ₃ /SiO ₂
No.3 炉壁粘土部(A)	71.84	15.23	0.53	0.05	0.06	2.67	0.212
No.3 炉壁粘土部(B)	62.33	11.58	0.47	0.12	0.05	14.91	0.186
延波たら釜土(製錬炉)(1)	65.59	18.63	—	0.23	Tr	3.37	0.284
石見国備谷たら釜土(製錬炉)(2)	77.16	14.91	—	0.03	Tr	1.91	0.193
靖国たら釜土(製錬炉)(4)	68.54	13.12	—	0.25	0.26	3.10	0.191
日本鉄鋼協会復元たら釜土(製錬炉)(3)	64.44	13.60	—	0.20	0.38	2.83	0.211
島上作刀鍛錬場火床羽口取付粘土(4)	54.28	19.10	0.89	1.17	1.33	4.62	0.352
島根県大東町塙田中新田羽口粘土部(5)	56.00	24.60	0.15	0.26	1.20	3.54	0.439

注:(1) 依 国一 : 古来の砂鉄製錬法 丸善1933

(2) 小塚寿吉 : 日本古来の砂鉄製錬法 “たら”について鉄と鋼第52年第12号

(3) 日本鉄鋼協会 : たら製鐵の復元とその鉄について 昭和46年2月27日

(4) 和銅記念館 : 島上作刀鍛錬場鍛冶津の調査 昭和63年6月30日

(5) 和銅博物館 : 塙田中新田製鐵遺跡出土鉄滓の調査 平成5年12月15日

6. 結 言

瑞穂町長尾原遺跡出土鉄滓について化学組成ならびに組織の調査を行った。
結果を要約すると次の通りである。

- (1) 資料No.1, No.2 鉄滓は鉱石(岩鉄)を原料に用いた製鍊滓と推定した。
- (2) 資料No.3 炉壁は資料No.1鉄滓の製鍊炉に用いられた炉壁と推定した。
- (3) 資料No.4 鉱石により含S鉱石が使用されたものと推定される。

以上の調査は日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノクス清永取締役に御指導頂いた。

参考文献

1. 大沢正己 : 古代出土鉄滓からみた古代製鉄、日本製鉄史論集 119P
(たたら研究会 1984)

第1表 馬場山遺跡出土遺物観察表

種類 番号	部族 番号	出土 位置	器種	寸法		胎土	焼成	色調		文様及び手法の特徴その他
				口径	底径			外	内	
1		包含層	石器	石器	石器					安山岩
2		表土	石器	削器						安山岩
3		包含層	弥生土器	亮	27.5		密、砂粒合	良好	淡橙色	口縁に3条の凹線、頭部に削突文、ヨコナデ、ヘラケズリ
4		包含層	弥生土器	亮	23.5		密、砂粒合	良好	淡橙色	暗灰色
5		包含層	弥生土器	亮	20.6		密、砂粒合	良好	淡橙色	口縁に3条の凹線、頭部に削突文、ヨコナデ、ヘラケズリ
6		包含層	弥生土器	透	29.3		やや粗	やや甘い	淡橙色	口縁に5条の凹線、ヨコナデ、ヘラケズリ
7		包含層	弥生土器	透	23		密、砂粒合	良好	淡橙色	口縁に5条の凹線、ヨコナデ、ヘラケズリ
8		包含層	弥生土器	透	20.4		密、砂粒合	良好	淡橙色	暗灰色
9		包含層	弥生土器	透	13.5		密、砂粒合	やや甘い	淡黄灰色	口縁に4条の凹線、頭部に削突文、ヨコナデ、ヘラケズリ
										外面ナデ、内面不明

第2表 顧庵原B遺跡出土遺物観察表

種類 番号	部族 番号	出土 位置	器種	寸法		胎土	焼成	色調		文様及び手法の特徴その他
				口径	底径			外	内	
10		包含層	弥生上器			密	良好	明褐色	淡橙色	外面部に斜行削突文施文の後3条の凹線、内面ハケ目
11		包含層	弥生上器			密	良好	淡橙色	暗灰色	外面部に斜行削突文施文の後2条の凹線、内面ハケ目
12		包含層	弥生上器			密	良好	淡橙色	灰色	外面部削突し工具による斜行削突文、内面ハケ目
13		包含層	弥生上器			密	良好	淡橙色	淡橙色	外面部削突工具による斜行削突文、内面ハケ目
14		包含層	弥生上器			密	良好	淡橙色	淡橙色	外面部削突工具による斜行削突文、内面ハケ目
15		包含層	弥生上器			密	良好	淡橙色	暗灰色	外面部削突工具による斜行削突文、内面ハケ目
16		包含層	弥生上器	亮	21.0		密、砂粒合	良好	橙色	淡黄灰色
17		包含層	弥生上器	亮	22.0		密、砂粒合	良好	暗橙色	外面部口縁部に3条の凹線、ヨコナデ、内面ハケ目
18		包含層	弥生上器	亮	21.3		密、砂粒合	良好	灰黃褐色	外面部に2条の凹線、ヨコナデ、ヘラケズリ、頭部に1条の凹線
19		包含層	石器	石器	長さ26cm、幅1.7cm 厚さ2mm、重さ1.8g					黒曜石
20		包含層	石器	石器	長さ26cm、幅1.7cm 厚さ2mm、重さ1.4g					黒曜石
21		包含層	石器	石器	長さ16cm、幅1.5cm 厚さ2mm、重さ1.4g					安山岩
22		包含層	石器	石器	長さ16cm、幅1.2cm 厚さ2mm、重さ0.5g					黒曜石
23		包含層	石器	石器	長さ22cm、幅1.2cm 厚さ4mm、重さ0.7g					黒曜石
24		包含層	石器	石器	長さ24cm、幅1.5cm 厚さ4mm、重さ0.7g					安山岩
25		包含層	石器	石器	長さ10cm、幅1.3cm 厚さ2mm、重さ0.3g					黒曜石
26		包含層	石器	石器	長さ16cm、幅1.6cm 厚さ3mm、重さ0.4g					黒曜石
27		包含層	石器	石器	長さ15cm、幅1.5cm 厚さ3mm、重さ0.5g					黒曜石
28		包含層	石器	石器	長さ15cm、幅1.1cm 厚さ3mm、重さ0.3g					黒曜石
29		包含層	縹文上器			密、砂粒合	やや甘い	灰黃褐色	灰黃褐色	外周8mm×3mm大の横円文
30		地山上	縹文上器			密、砂粒合	良好	焦付着	灰茶褐色	口縁内側平行短線
31	SI-1	弥生上器	亮			密、砂粒合	良好	淡橙色	淡黄灰色	外周削り突文、ハケ日調整の痕ナデ、内面ハケ目

辨別 番号	国版 番号	出土 位置	器種	寸法			胎土	焼成	色調		文様及び手法の特徴その他
				口径	底径	器高			外	内	
32	SI-1	弥生土器	壺				密、砂粒含	良好	暗灰色	淡黄灰色	外面部突起文、斜行並拂、ナデ、内面ヘラミガキ
33	SI-2	弥生土器	壺	11.4			密、砂粒含	良好	褐色	灰褐色	外面部ヨコナデ、内面ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ
34	SI-2	弥生土器	壺	7.0			密、砂粒含	やや付	灰黄褐色	灰黄褐色	外面部ナデ、内面ナデ、ヘラケズリ
35	SI-2	弥生土器	壺	14.2			密、砂粒含	良好	淡橙色	灰褐色	外面部ヨコナデ、内面ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ
36	SI-2	弥生土器	壺		5.3		やや粗	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	外面部ナデ、内面ヘラケズリ、撫頭压痕
37	SI-2	石器	砾石	長さ10.4cm、幅0.6cm、厚さ4.0cm、重さ32kg							
38	SI-3	弥生土器	壺				密、砂粒含	やや付	淡褐色	灰茶褐色	外面部部斜行刻夷文と1条の凹線、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
39	SI-3	弥生土器	壺	10.6	5.6	6.6	密、砂粒含	良好	赤褐色	赤褐色	外面部ナデ、内面ナデ
40	SI-3	石器	砾石	長さ11.8cm、幅0.5cm 厚さ2.6cm、重さ270g							
41	SI-4	土器	砂輪車	直径3.3cm、底さ3.4cm、重さ5.5kg、中央孔5.5cm			密	良好	暗黄褐色	灰黄褐色	外面部ハケメ、内面ヘラミガキ
42	SI-4	土器	砂輪車	直径3.6cm、底さ4.5cm、重さ5.7kg、中央孔5.5cm			密	良好	暗黄褐色	灰黄褐色	外面部ハケメ、内面ヘラミガキ
43	SI-4	土器	砂輪車	直径3.8cm、底さ5.6cm、重さ10.2kg、中央孔5.5cm			密	良好	灰黃褐色	灰黃褐色	外面部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ
44	SI-4	土器	砂輪車	直径3.8cm、底さ5.5cm、重さ53kg、中央孔5.5cm			密	良好	灰黃褐色	灰黃褐色	外面部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ
45	SD-1	土器	壺	29.0			密	良好	灰白色	灰褐色	山跡部に3条の凹線、頸部に新月彌文2条、内面ヨコナデ、ハケメ
46	SD-1	土器	広口壺				密	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	外面部部に3条の凹線、口縁部格子目文、内面ハケメ
47	SD-1	土器	壺				密	良好	灰白色	灰白色	外面部圓形に1条の周目突起、ハケメ、内面ハケメ
48	SD-1	土器	壺				密	良好	灰白色	灰白色	外面部立文、ヘラミガキ、内面ヘラミガキ
49	SD-1	土器	壺	12.7	3.5	10.2	密	良好	暗褐色	暗褐色	外面部ナデ、内面ヘラミガキ
50	SK-1	土器	壺	19.0			やや粗	やや付	灰黃褐色	明黄褐色	青筋紋に斜行拂、斜行拂、丁字に横筋、(中)ヨコナデ、ヘラミガキ
51	SK-1	土器	壺	23.2			密、砂粒含	良好	赤褐色	黄褐色	赤褐色に4条の凹線、頸部ヘラミガキによる斜行文、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
52	SK-2	土器	壺	14.0			密、砂粒含	やや付	褐色	灰褐色	灰褐色に5条の凹線、斜行拂、斜行拂による凹線(左のみ)、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
53	SK-2	土器	壺	14.8			密、砂粒含	良好	橙色	淡黄褐色	淡黄褐色に5条の凹線、斜行拂による凹線(左のみ)、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
54	SK-3	土器	壺	14			密、砂粒含	良好	灰黃褐色	灰黃褐色	外面部に2条の凹線、頸部に新月彌文と乳突文、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
55	SK-3	土器	壺	24.6			密、砂粒含	良好	淡黃褐色	淡黃褐色	外面部ヨコ3条の凹線、内面ヨコナデ
56	SK-3	勾玉		長さ1.9cm、幅1.1cm 厚さ6mm、重さ19g							ヒスイ

第3表 長尾原遺跡出土遺物観察表

辨別 番号	国版 番号	出土 位置	器種	寸法			胎土	焼成	色調		文様及び手法の特徴その他
				口径	底径	器高			外	内	
57	SI-1	弥生土器	壺	20			密、砂粒含	良好	褐色	褐色	外面部斜に櫛歯状工具による波状文、内面ヨコナデ
58	SD-1	弥生土器	壺	16.6			密、砂粒含	良好	褐色	褐色	外面部無文、ヨコナデ、ヘラケズリ
59	SD-1	弥生土器	壺	12.4			密	良好	灰白色	暗灰色	外面部無文、ヨコナデ、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
60	SD-1	弥生土器	壺				密、砂粒含	良好	淡褐色	淡褐色	外面部櫛歯状工具による波状文、内面ハケメ
61	SD-1	弥生土器	壺	23.2			密、砂粒含	良好	灰色	灰褐色	外面部無文、ヨコナデ、ヘラケズリ
62	SD-1	弥生土器	壺	17.0			密、砂粒含	良好	橙色	褐色	外面部無文、ヨコナデ、内面ヨコナデ
63	SD-1	弥生土器	壺	14.8			密、砂粒含	良好	淡棕色	褐色	外面部無文、ヨコナデ、内面ヨコナデ、ヘラケズリ

所蔵 番号	図版 番号	出土 位置	器種	寸 法			胎 土	燒 成	色 調		文様及び手法の特徴その他
				口径	底径	器高			外 面	内 面	
64	SD-1	弥生牛上器	壺	19.5			密、砂粒含	良好	暗橙色	暗褐色	外表面無文、ココナデ、内面ヨコナデ、ヘラケズリ
65	SK-4	石器	石斧	長さ26cm、幅17cm 厚さ2mm							磨製石斧。材質結晶片岩
66	A3号壙	須恵器	环身	11.6	4.0	密	Hい	暗黄褐色	暗灰色		外面回転ナデ、内面回転ナデ
67	A3号壙	須恵器	环身	13.6	3.3	密	良好	灰白色	灰白色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
68	A3号壙	須恵器	环身	12.0	3.5	密	良好	灰白色	灰白色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
69	A3号壙	須恵器	环身	11.0		密	Gい	暗灰色	暗灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
70	A3号壙	須恵器	环身	11.8	4.1	密、砂粒含	Gい	暗灰色	暗灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
71	A3号壙	須恵器	环身	12.2		密	良好	灰色	灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
72	A3号壙	須恵器	环底	12.8	4.3	密	良好	青灰色	青灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
73	A3号壙	須恵器	瓶?	7.6		密	良好	暗灰色	暗灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
74	A3号壙	須恵器	瓶?	5.0		密	良好	暗灰色	暗灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
75	A3号壙	須恵器	瓶?	5.4		密	良好	暗灰色	暗灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
76	A3号壙	須恵器	壺	16.2		密	良好	青灰色	青灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
77	A3号壙	須恵器	壺	23.4		密	良好	綠色	青灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ
78	A3号壙	須恵器	壺	38.8		密、砂粒含	良好	青灰色	青灰色		外表面回転ナデ、内面回転ナデ、沈線、内面回転ナデ
79	A3号壙		勾玉	長さ3.5cm、厚さ8mm 重さ7.5g、孔径1.5~5mm					農綠色		
80	A3号壙		勾玉	長さ3.2cm、厚さ14mm 重さ17.4g、孔径1~3mm					綠色交じりの乳白色		
81	A3号壙		ガラス 小玉	径9mm、重さ0.9g					綠色		
82	A3号壙		耳環	長さ20.0cm、直径1.8cm 断面径4.5mm、重さ3.5g						側又は背面に金メッキ	
83	A3号壙	鉄器	刀子	残存長11cm 刀身部6.0cm、茎部5.1cm						先部には木質が残る	
84	A3号壙	鉄器	刀子	残存長2.4cm 刀身部2.4cm、茎部5.0cm						茎部には木質が残る	
85	A3号壙	鉄器	刀子	残存長1.5cm						鍍金具	
86	A3号壙	鉄器	刀子	残存刀身部6.7cm							
87	A3号壙	鉄器	刀子	残存刀身部7.1cm							
88	A3号壙	鉄器		残存長4.0cm						病歿か	
89	A3号壙	鉄器		残存長5.7cm						鉄族の茎か	
90	A3号壙	鉄器		残存長4.7cm						刀子の茎か	
91	A3号壙	鉄器	環状 鉄製品	長径6.2cm、短径4.0cm 断面径8~10mm						馬具か	
92	A3号壙	鉄器		残存長6.4cm							
93	A3号壙	鉄器		残存長 cm、径4mm						径1mm程度の管状	
94	A3号壙	鉄器	笠釘状 鉄製品	径9mm						鍼か	
95	A3号壙	鉄器	等釘状 鉄製品	径9mm						鍼か	
96	A3号壙	鉄器	笠釘状 鉄製品	笠部径1.9mm 釘部径1.7mm						鍼鍛冶器	
97	A3号壙	石器	金床心	長さ55cm、幅44cm 高さ26cm						右室模石	

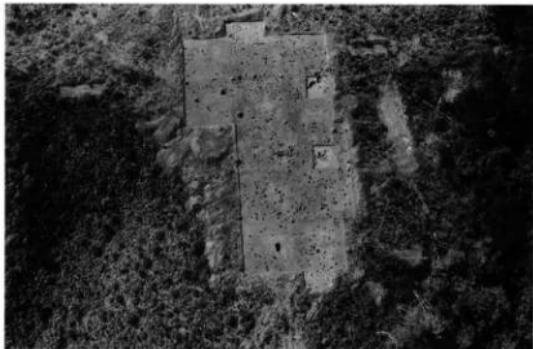
図 版



図版第1



a. 馬場山遺跡遠景
(南東から)



b. 同空中写真
(真上から)

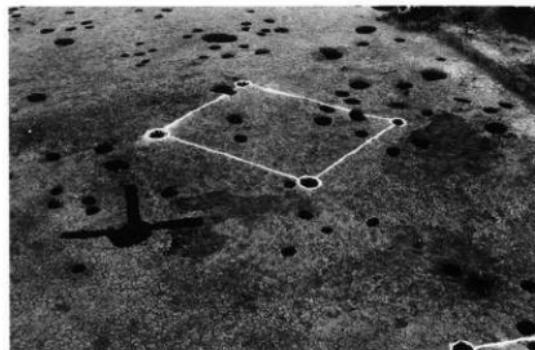


c. SK-1土層断面
(南東から)

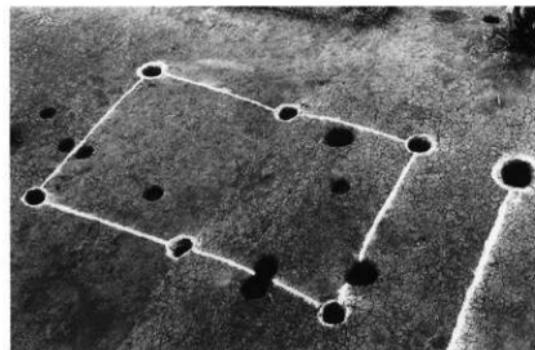
図版第2



a. SK-1発掘状況
(南東から)

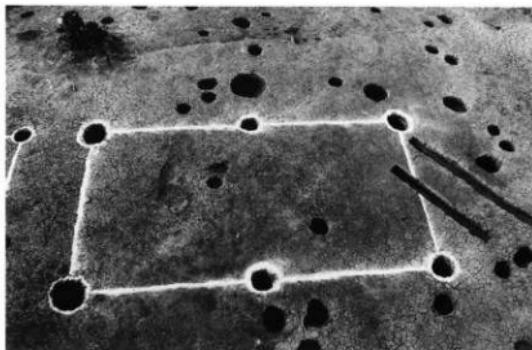


b. SB-1発掘状況
(北から)

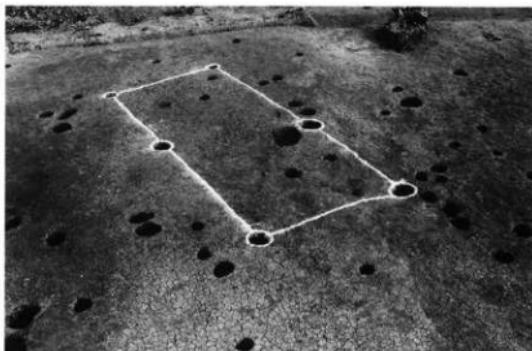


c. SB-2発掘状況
(東から)

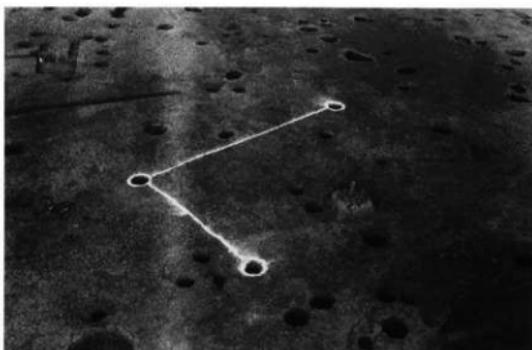
図版第3



a. SB-3完掘状況
(南東から)

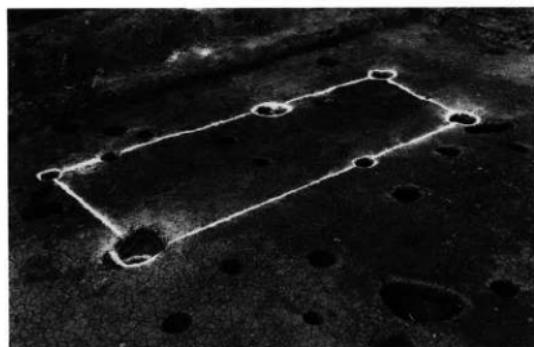


b. SB-4完掘状況
(西から)

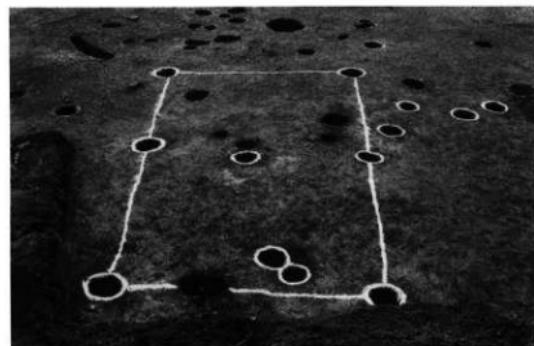


c. SB-5完掘状況
(南西から)

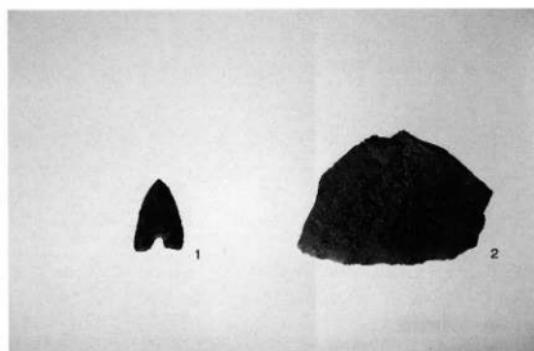
図版第4



a. SB-6発掘状況
(南から)

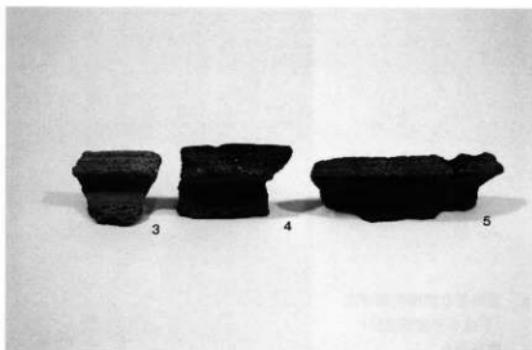


b. SB-7発掘状況
(北東から)

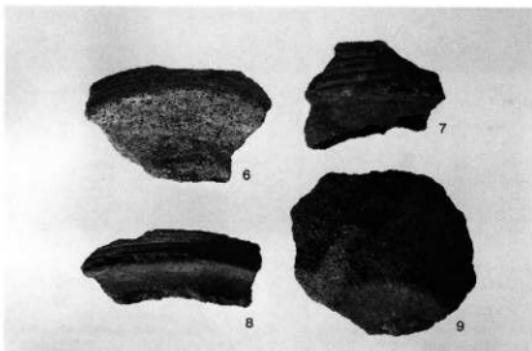


c. 馬場山遺跡出土遺物

図版第5



a. 馬場山遺跡出土遺物

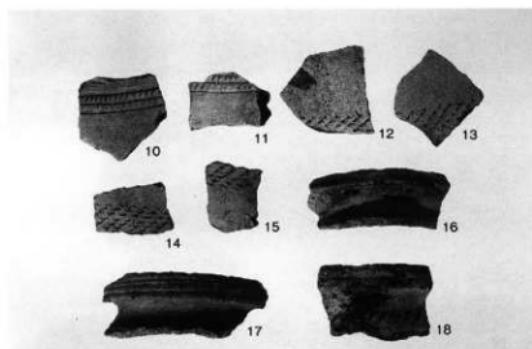


b. 同

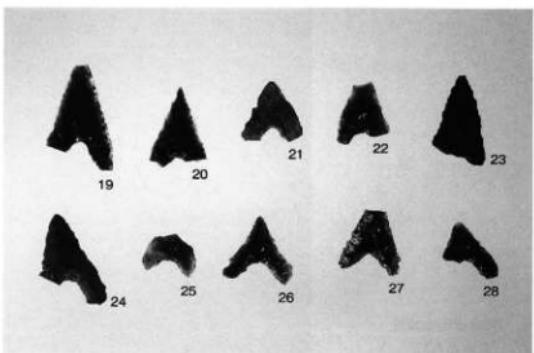


c. 順庵原B遺跡遠景
(平成6年度調査区)
北東から

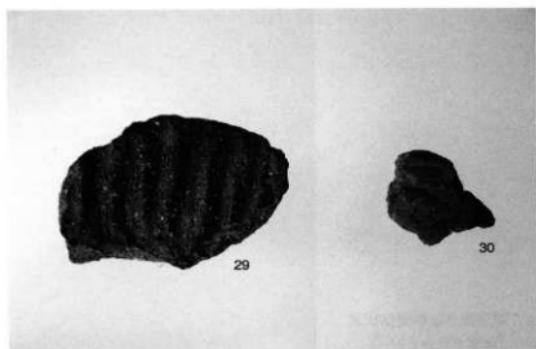
図版第6



図版第7



図版第8



a. 順庵原B遺跡出土遺物



b. SI-1検出状況
(西から)

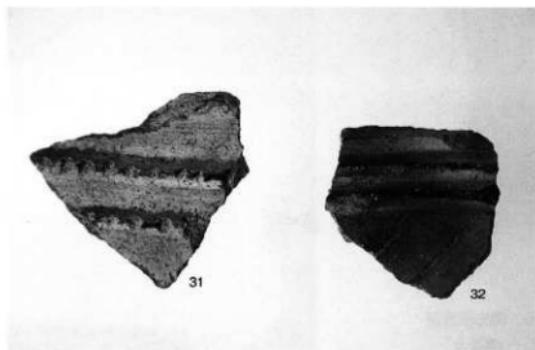


c. 同遺物出土状況
(北東から)

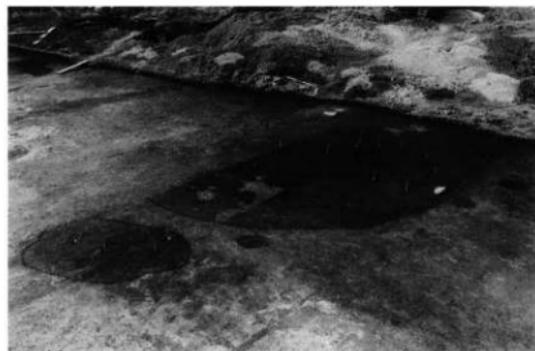
図版第9



a. SI-1発掘状況
(北東から)



b. 同出土遺物



c. SI-2検出状況
(南から)

図版第10



a. SI-2遺物出土状況
(西から)



b. 同発掘状況
(北から)



c. 同出土遺物

図版第11



a. SI-2出土遺物



b. 同



c. 同

図版第12



a. SI-2出土遺物



b. SI-3検出状況
(北から)



c. 同遺物出土状況
(南東から)